

抑も逆位に於て胎兒を危くする原因は則ち其頭部のいまだ出でざるに先つて呼吸運動をなすに在ると已に前項に述べたるが如し而して此呼吸運動は通例臀部出でたる後に至りて始めてこれをなすが故に胎兒安危の分は則ち只臀部に續ひて出づべき所の肩胛および頭部等の産出速かあると否らざるにあり然るに臀位に在りては胎兒の骨盤と兩下肢とを合したる大部先出で、産道を十分に擴張しあるを以て尋で出づる所の肩胛および頭部の通過もまた従ふて容易なれども足位および膝位に在ては斯る便利の前驅に乏し是此二位に於ては臀位より害を受けること多き所以なり此理に依てまた全足位および全膝位の其不全位より害あること自ら明かなるべし

其臀位たり足位たりまた膝位たるに關せず胎兒産道を通ずるに當て兒背は上文の如く母の左前方若しくは右前方に向ふことは是則ち諸般の骨盤位に於る常規の體向なれども罕にまた破格の體向を取て其左後方若しくは右後方に向ふことありこれを骨盤位の第二類とす即ち兒背の左後方に向ふものを第一骨盤位の第二類といひ右後方に向ふ者を第二骨盤位の第二類といふが如き是なり而して常規の體向を第一類といふ但し胸腹の出づるときは第二類なるも肩胛部の出づるに臨み兒背遂に前方に轉じて以て常規の體向に變ずるものまた膝位からず故に其始第二類の體向を以てすればとてかあらざしも終に至るまでこれを固占すべきものにあらざ然れども胎兒若し常の如く其頭を前に俯さすして後に反するときはその骨盤内に入るに従ふて後頭漸々後方に轉じ順は耻骨縫際に向ふて以て終に



第二類の儘にて産出するに至るものなり斯る場合に於て兒頭の骨盤下口を通過するに方ては先其前方に向ふ所の剛強く耻骨縫際に向ふて壓せられ而して後會陰の前よりして後頭、顛頂、前額、顔面等順次相尋で顯れ出づるものとす故に其機轉は大略頭蓋位に在て兒頭の骨盤下口を撥露する時に於るが如し

○第五章 複胎分娩

複胎分娩の經過れよび機轉は其大體に於ては固より單胎分娩に異なる所なしといへども彼に比すれば胎兒の位置、體向、體勢等に於て破格若くは異常の者頗る多し

複胎の多少は土地風土の異なるに従ふて一様ならずといへども西

洋の統計に據れば雙胎分娩は大約八十人にして一人品胎分娩は五千人にして一人なりといふ而して産前に於てあれを診断するもと家外容易ならずといへども注意深き産婆は已に妊娠中にあれを診定し得べし勿論單胎に比すれば子宮は大にして胎動もまた強きを常とすれども是等の事は其鑑定に殆ど價値なきものなり概して妊娠を鑑定する時の如く複胎を鑑定するにもまた其確證たるべきものは則ち胎兒より來る所の證候にして例之腹の數箇所にて其調子の同じからざる心音を聴取するか或は見頭、見背等を二個以上觸知するが如き抑も單胎に於て有るべからざる物を内外診にて確と發見する是なりまた産時に臨み一個の胎兒已に生れたる後に於ては其診断愈々容易なり例之胎兒生るゝも子宮常の如く縮小せず其大さ殆ど原の儘にしてあれを按すればまた胎兒を觸れ内診すれば



更に胎胞を觸るゝが如きは是なり但し罕には更に胎胞を生ぜずして直に胎兒を觸るゝとあり

雙胎分娩は單胎分娩に比すれば其胎兒の位置體向等に破格異常の者多きを除くの外其經過および機轉に至りては彼是概して異なる所あり只其經過に於て一兒生れて後直に娩隨期に至らすして更にまた胎胞を生じ陳痛を起して以て第二兒を出だすの差あるのみ但し第二兒の産出は甚だ速かにして第一兒の産出後三十分以内に於てするを例とす然れども罕には數時若くは數日を経過して後始めて第二産出陳痛を起するとありまた娩隨は通常胎兒の殘らず産出し了りたる後に至て一個に合し若くは罕に二個に分れて出づるものなり○胎兒の位置は二兒とも頭位を以てするもの最も多くあれに次々者は第一兒は頭位にして第二兒は骨盤位なり而して第一兒

骨盤位にして第二兒頭位を取るはまた其次にして二兒共骨盤位を取るは最も罕なり

品胎および要胎分娩の經過は概ね雙胎に異なるものとなく娩隨もまた通例胎兒の殘らず産出したる後に至て出づるものなれども時として先ん生れたる胎兒に屬する所の娩隨後に残りたる胎兒に先づつて出づるものとあり

複胎分娩に於ては前に述べたるが如く臀位、足位、顔面位の如き破格の位置體勢を取り或は臍帯および手足の脱出若くは横位の如き異常の位置體勢を來すと單胎に比すれば甚だ多し就中第二兒に在りて然りとすまた娩隨期に至て出血するものと尠からず

○第六章 分娩初期の鑑定

分娩初期の鑑定は陳痛の性質、産道軟部の有様れよび



### 卵膜の摸様に依てこれとをすべし

分娩の初期即ち産氣のきたるや否やを定むるに只陣痛の有無をのみ以てすればおれを誤るゝと甚だ勘からず如何となれば本巻第三章に述べしが如く子宮の收縮は已に妊娠の末期よりおれおればなり故にこれを鑑定するには宜く陣痛の性質に注意し兼て産道軟部および卵膜の有様を明かにせざるべからず即ち其陣痛は一往一來規律正しく前驅陣痛に比すれば強くして長く且發作頻數なり腔は温度高まりて粘液の分泌増し子宮口は陣痛毎に緊張して漸く開大し卵膜の下端は陣痛の發作時に護膜球の如く緊満して子宮口内若くは其口外に膨出する等是なり

### 第七章 分娩經過中胎兒生存之鑑定

胎兒の生存は其生活顯象の存在に由てこれと定むべ

きこと勿論なれども産婆自らこれと認むるにあらざればいまだ確實ならず

分娩の經過中胎兒の生存を定むるには其心音若くは臍帶雜音を聴取するか胎動を發見するか或は其脱出せる手足若くは臍帶に於て脈搏を觸知するが如き總て生活顯象の存在を以てするものと更に言ふまでもなければ産婆自らおれを發見するにあらざれば産婦の訴のみにてはいまだ確實ならず殊に胎動に於て然りとす○上記諸候の外尙胎兒の下部部に産瘤を生じて其癒漸々増大緊張するを認めたらばまた以て胎兒の生存を證明するに足る

### 第八章 産婦の養生れよび其取扱法

産床に臨んで産婆の宜く務むべきことは則ち至當の



看護を施して害を未然に防ぎ以て母兒の健康を護り  
 また細に分娩の経過に注意して聊たりとも異常を察  
 するときは疾にこれと産料醫に托して以て母兒の危  
 殆を除くに在り然れども経過正規の者に在ては自然  
 に戻りて其分娩を促すが如き處置を決して爲すべ  
 ならず

正規の分娩は病にあらすといへども其経過中産婦の養生ならびに  
 産婆の取扱どもに宜を得ざるときは容易に變産に陥る者なり故に  
 産婆は其看護を托せられたる産婦の容體および其舉動に始終注意  
 し總て正規の経過を妨ぐべき虞ある事物を避けしめて以て母兒の  
 健康を保護すべきは勿論また斷へず諸般の模様を注意して瑣細の

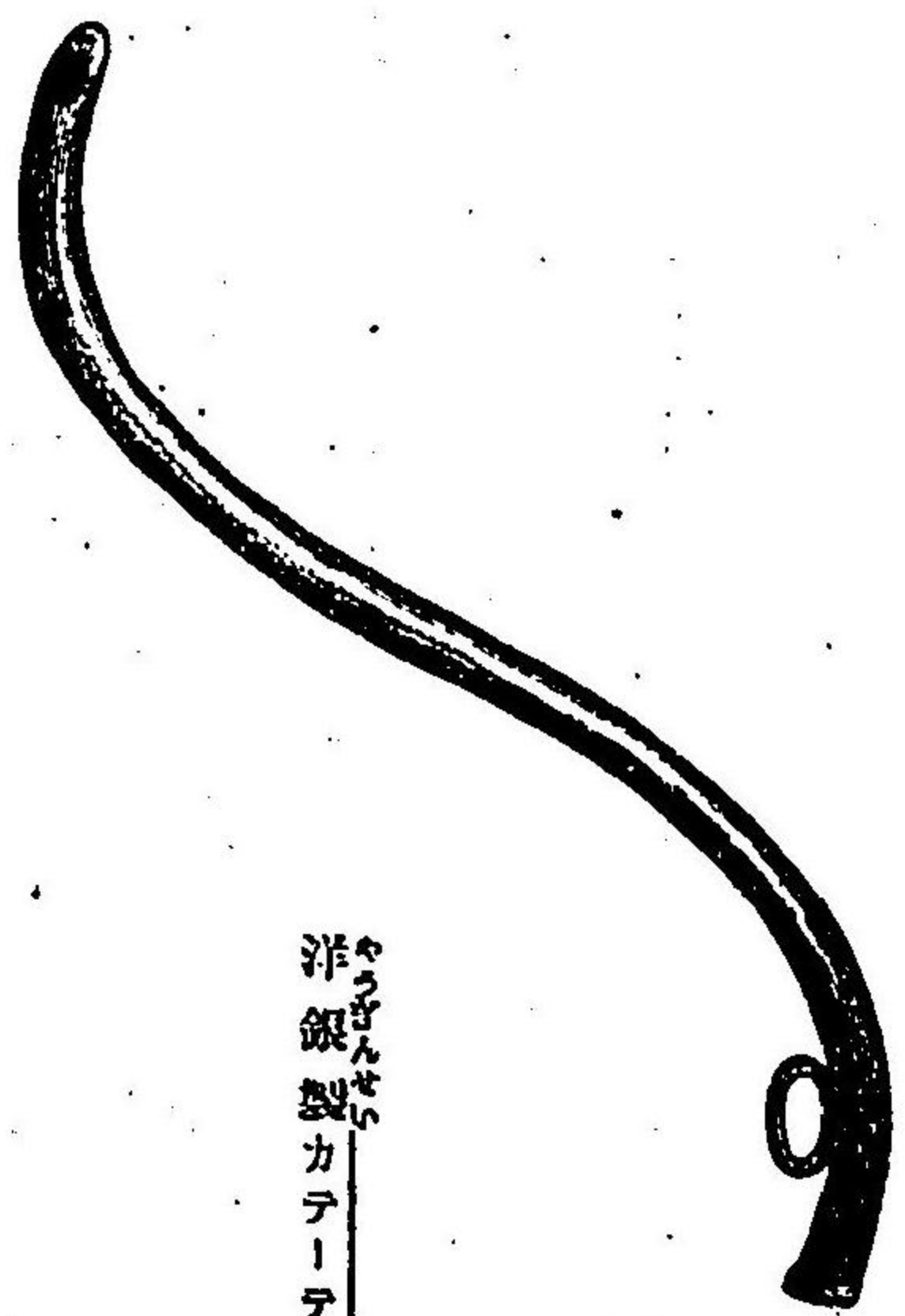
變化たりともあれを看過するなく若し正規に戻る所あらば時機を  
 誤らず疾に産科醫に訴へて其處置を請ふべし是産婆の職務中最も  
 緊要の事件なり然れども其経過正規なる者に在ては全くあれを自  
 然に任じ決して分娩を促すが如き處  
 置を爲すべからず如何となれば最も滑かに分娩  
 を経過せしむる者は只是自然の力にして産婆のあれを促すが如き  
 は適を以て母兒の健康を害するに過ぎざればなり

産婆は豫め入用の衣類器械等と準備しまた己の身體  
 も常に清潔にし産婦の招に接せば時機を誤らずして  
 速かにふれに應すべきやう始終注意を怠るべからず  
 産の経過は實に變化極りなきものあり而して一朝其常を失すれば



其變やまた甚だ急あり故に産婆は晝夜を擇ばす速に産婦の招に應  
 ずべきやう衣類器械および藥品等を準備し置くは勿毎毎にこれを  
 清潔にし且己の身體をもまた不潔ならざるやう豫て注意すべし實  
 に彼の恐るべき産褥熱は皆此注意の足らざるに因て來る者なり嗚  
 呼安産の喜いまた失ならずして忽ち死別の悲に陥るもの世間抑も  
 幾何ぞ而して其慘毒の潛む所は他にあらす 只清潔の注  
 意に到らざる所  
 にあり深く慎むべし  
 但し産婆の豫て準備し置く  
 べき器具藥品等は則ち左の  
 如し

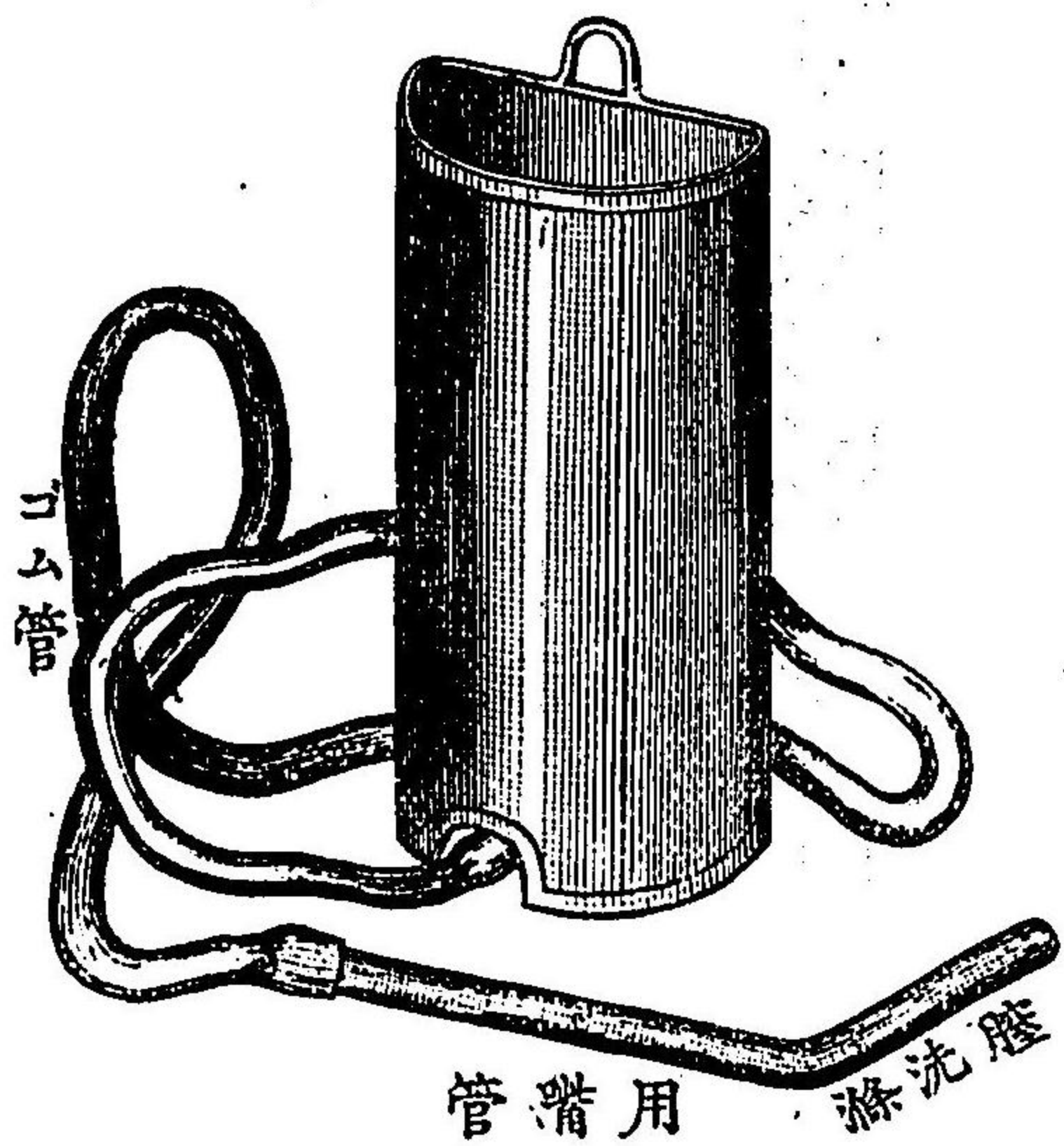
〔一〕洋銀製のカタートル一個



洋銀製カタートル

圖九十三第

〔二〕閉張若くは  
 鉄葉製のイリガ  
 ートル一個但し  
 長さ三尺許の護  
 謨管を附す  
 〔三〕錫製若くは象  
 牙製の灌腸用嘴  
 管大小二個但し  
 灌腸する時に臨  
 みおれをイリガ  
 ートルの護謨管  
 の端に附して直



管嘴用

灌洗器

一閉張のイリ  
 ガートルに護  
 謨管および  
 子製の灌洗  
 用嘴管を附す



灌腸用嘴管

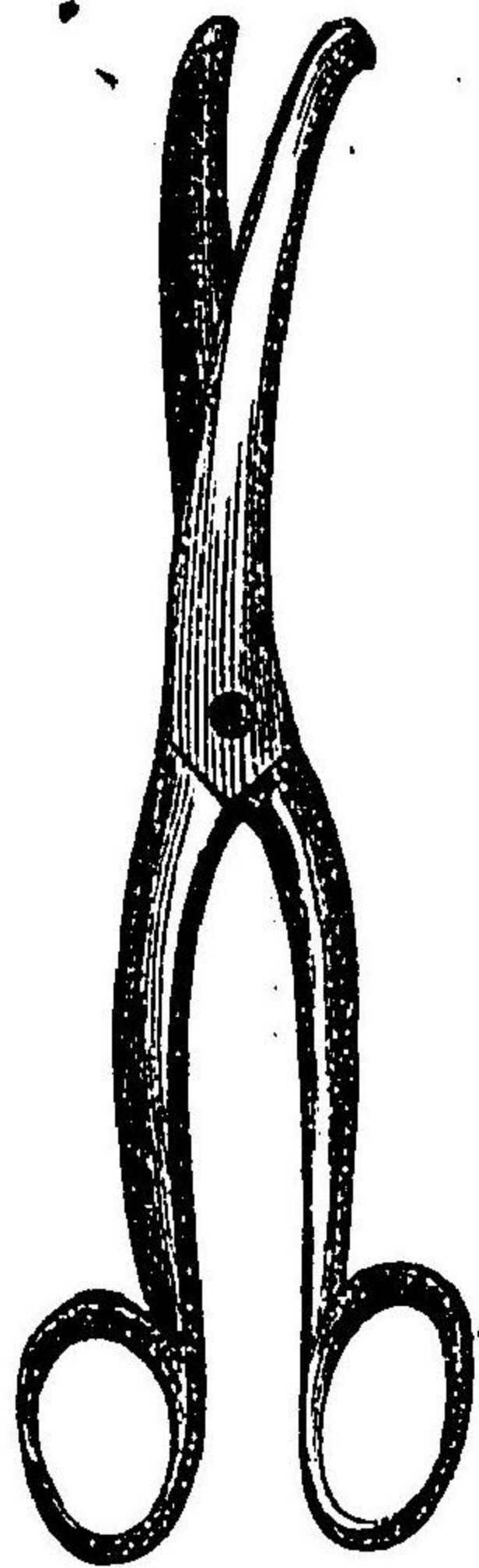
圖一十四第

圖十四第



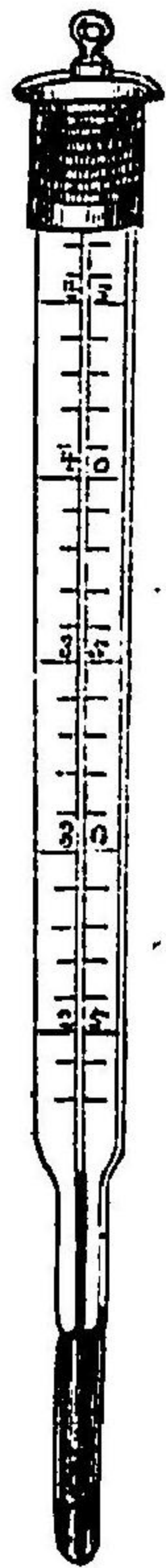
腸に挿入す面して其大なる者は産婦の用とし小なる者は小児の用とす  
 〔四〕硝子製若くは錫製の腔洗器  
 滅菌用嘴管

圖二十四第



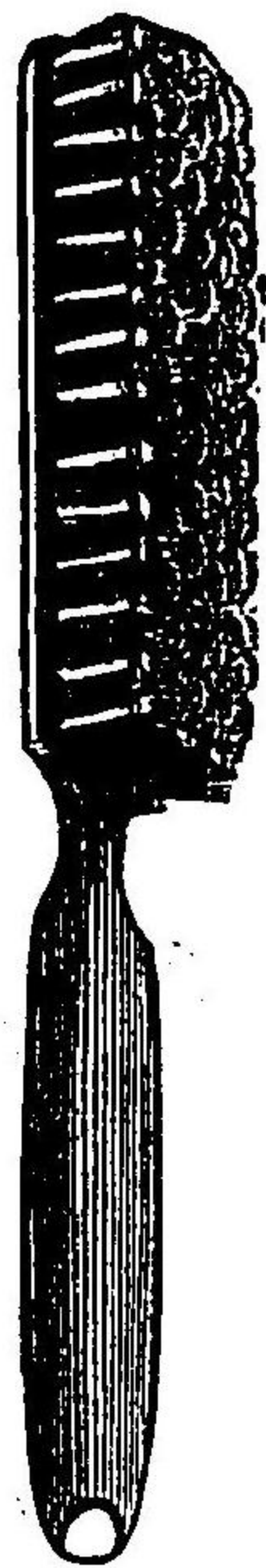
臍帶剪刀

圖三十四第



攝氏の検温器

圖四十四第



爪刷毛

一個但し是もまた用ふる時に臨みイリガートルの護謨管に附そるなり

〔五〕臍帶剪刀一個

〔六〕検温器一個

〔七〕爪刷毛一個

〔八〕長さ六七寸許の強き麻糸若くと絹糸數條是臍帶を結ぶに用ふる者あり

〔九〕糊を脱したる晒木綿一反、サリチル酸綿若くと脱脂綿若干および白の木綿糸一卷但し是等皆他物と混ぜざるやう別に鐵葉罐に客れ置くべし

〔十〕新に洗濯したる白木綿の前懸一個

〔十一〕五十倍の石炭酸ワゼリン若くと五十倍の石炭酸油を入れたる



大口の硝子の小瓶一個但し石炭酸油はこれを綿に浸し置くべし  
〔十二〕流動性の石炭酸三十匁許を容れたる瓶一個但し五十倍の石炭  
酸水を製するには五合の清水中に此石炭酸一食匙半許を和し三十  
倍の石炭酸水を製するには二食匙二十倍のものを製するには三食  
匙餘を和すべし

〔十三〕ホフマン液を容れたる小瓶一個

右の外資家に招かれたる時は尙石礮、手巾ならびに三尺方許の護謨布  
若くは油紙を携帯するを便とす但し以上の諸器具とををを用ふる  
前後に於て清潔に掃除するを勿論就中カテーテル、塵洗液用嘴管、灌  
腸用嘴管およびイリガートル等とをこれを用ふるに臨んでかならず  
先五十倍の石炭酸にて清らかに洗ふべし若くはまた病に罹りし孕婦  
に用ひたらむ其都度かあらむ五十倍の石炭酸中にて三十分時間許

りこれを煮護謨製の者は二十倍の石炭酸中に三十分時間浸し置  
くべしまた綿、布片、海綿等は聊かにても不潔の慮あらば決してあそ  
を用ふべからず○石炭酸は劇藥品なれば日本局法の二十五倍の石  
炭酸水を除くの外産婆直に薬舗より購求すべからざるを以て平素  
懇意の醫者に就てこれを求め置くも可あれども産婆は通例妊娠中  
より其看護を托せらるゝ者なれば妊婦に諭して五十倍乃至二十倍  
の石炭酸二升許ならびにカテーテル、イリガートルおよび其附屬の  
嘴管其他産床に入用の綿、晒木綿、油紙等を始め小児の衣類に至るま  
で豫てこれを準備し置かしむるを良とす

〔甲〕頭産の取扱法

産床に臨んでは先産婦の來歴を尋問し而して後内外  
診と施して以て産機果して始よりしや如何なる分娩



期に至りしやと明かにし尋で母兒の容體胎兒の位置、  
 陳痛の性質、産道の有様等と檢し而して一も懸念すべ  
 き異常なきときは産室れよび産床を整へ所用の諸器  
 具を備へ以て徐に経過の摸樣を窺ひ法に従ふて處分  
 すべし

●産婦の來歴に就て先尋問すべきものと則ち其初産な  
 るや經産なるや最終月經を距るものと幾月幾日なるや妊娠中殊に其  
 末期に至て變りたることなかりしや陳痛の始まりしと何時なるや  
 等を問ひ若し經産婦ならむ以前の産の摸樣をも尋ぬべし然れども  
 産婆の産床に臨んだる時産婦已に腹壓を營むる若くは戰慄陳痛を  
 認むるか或は出血あるが如き總て急迫の場合に於ては右の尋問を

措て直に診察を始むべし

●診察と總て前卷第四章の法則に従ふてこれを爲すべし但し  
 清潔之妊婦に於るより更に緊要なり故に先白き前懸を穿ち手織を  
 懸け爪刷毛を以て石礮にて善く手を洗ひ尙五十倍の石炭酸中に於  
 て叮嚀にこれを清め殊に注意して爪の垢を去り尋で産婦の外陰部  
 を清潔にし若し腔内より濃汁を出すが如きことあらば内診に先  
 ちイリガートルを以て三十倍の石炭酸にて腔内を洗滌すべし而し  
 て後本卷第六章に掲げたる證據に依て其眞に産機が始まりしや否  
 やを定め産機果して始まりし者ならば其如何なる分娩期に至りし  
 やを明かにすべし其他内外診に由て檢すべき者は産婦の體格容貌、  
 胎兒の位置體向死生骨盤の形狀大小、産道軟部の硬軟廣狹長短およ  
 び陳痛の度數強弱等にして要するに診察の順序は皆前卷第四章よ



掲げし所に異なることなし然れども若し前に述べしが如き急迫の場合に臨んでは直に内診より始むるを法とす概して内診に就て最も注意すべき所は子宮口と胎兒下向部との二なり即ち子宮口の大きさは如何或は已に開大し盡したるや其縁は薄く軟かにして延長し易きや或は厚く硬くして延長し難きや等を検し兼て胎胞の尙存するや或と已に破れたるやを探るべし下向部に就ては先其何部なるやを定め而して後其體向を審かにすべし例之頭蓋位に於ては矢狀縫合の方向、大小顱門の所在、顔面位に於ては其長徑の方向、口、頤および前額の所在等を検するが如き是あり

上記の診察に由て母兒の容體、産道の摸樣、胎兒の位置、陳痛の性質等に於て總て異常なきを診定せば別に醫を迎ふを要せず直に灌腸を行ひ産室および産床を整へ要用の器具を洩れなく備へて以て後の

経過を窺ふべし然れども産婦若くは其親戚より醫を迎へんことを望まば決してこれを拒むべからずこれを拒めば反て己の責任を重くすべき不利益あり

●産室 には朝かにして空氣の流通善く閑靜にして清潔なる所を擇び日光の直に指し込むが如きはこれを避くべしといへども夜中は燭を點して十分に室内を照らすべし固より冬は成るべく煖かにして戸隙の風を防ぎ若し室内に煖爐の備あらば適宜にこれを煖むべしまた室内に不要の家財ならびに香氣高くあるひは眞氣強き物あらば皆これを除き犬猫等を出だし多人數を遠ざけ殊に心配深き姑などは決して室内に居らしむべからず而して産婦の傍には只温順伶俐にして産婦の意に適ふたる婦人一名乃至二名を居らしめ以て産婆の助をなさしむべし



●産床には通常の蒲團を用ひ其上に蒲團より尙廣き油紙若くは護謨布を敷き更に上敷を以てこれを覆ひまた腰の下には別に清潔の麻布若くは晒木綿を幾重にも折り重ねてこれを敷き以て腔内より流れ出づる所の液汁を盡く收め得て外に漏れざるやうになすべし若し貧家にして右等の物に乏しきときは新に洗濯したる白地の浴衣若くは清潔の白紙を用ひて苦しからす然れども從來慣用せるが如き不潔の襟襖は嚴禁にこれを禁せざるべからず若しまた家に臥臺の備あらは宜く産床をこれに設くべし大に取扱に便あり然れども産婦の身體を没するが如き柔かなる羽蒲團は甚だ不便あり總じて産床は成るべく壁窓等より隔てゝ以て産婦の前後左右より自由に人の近き得べき所に設くべしまた産婦の被衾は通常のものにして餘り重からざる

を良とす衣服は緩裕にして究窟ならざるを若し枕は稍高きを可とす

●産床に入用の器具は産婆の携帶すべき物を除くの外尙左の諸品とす

〔一〕小兒の入浴に用する鹽一個〔二〕金盥二個但し一個は産婆の手を洗ふに用ひ一個は石炭酸を容れて器械布片等を浸すに用ふる者〔三〕産兒を包みおらびに浴後これを拭く爲に用する麻布若くは木綿布若干但し是は前より煖め置くべし〔四〕臍帯を纏ふに用する布片および紉帶〔五〕産兒および穉婦の衣類但し豫て煖め置くべし〔六〕多量の温湯および冷水〔七〕ブリキ製若くは陶製の便器一個〔八〕中等大の枕子一個是産婦の腰下に敷き或は其兩脚の間に挟むに用する者なり但し坐蒲團を卷ひてこれを油紙および布片にて包むる可あり〔九〕石鹼



および清潔に洗ふたる手巾數條「十」塊隨を容るゝに用する器一個「十」  
 一「麻若くは木綿製の布片若干是産婦の陰部を掃除する爲に用する  
 ものなれば豫て五十倍の石炭酸水中に浸し置くべし  
 其他イリガートルの護膜管、膈内洗滌用の嘴管、カテーテル等は豫め  
 五十倍の石炭酸中に浸し置くを良とすまた産婦および産婦の陰部  
 を掃除するに海綿を用ふる者あれども是甚だ不可なりかならず清  
 潔ある布片を用ふべし初生兒を洗ふにもまた然り  
 以上頭産の總體に就て産所の準備を述べたる者なり左に各頭産の  
 各期に就き産婆の取扱ふべき事件を順次記載すべし

其一 頭蓋産の取扱法

頭蓋産開口期の取扱に就て注意すべき要件は先大小  
 便の通利を促して運動れよび腹壓を禁じ内診を屢々

せざる等是なり然れども胎胞破るれば更に手捷く内  
 診を施して下向部および子宮口の模様ならびに其他  
 の關係を明かにするを要す

開口期に於て産婆の第一になすべきことは則ち大 小 便 の  
 排 泄 を 促 す に あ り 是直腸および膀胱に大小便滯  
 ふるときは爲に子宮の收縮を減じ産道の抵抗力を増して以て産出力  
 の作用を妨ぐるが故なり故に假令分娩期に先ち自然に二便の通利  
 ありていまだ時を経ざる者にても尙これを等閑にすべからず而し  
 て大便を促すには緩和の灌腸を施し小便は大抵産婦自ら排泄し得  
 るものなれども若し屈んで排泄し難きときは仰臥せしむれば容易  
 に通することあり然れども尙利し難きときは指を前穹隆部に入れ  
 て見頭を少く上方に壓すれば自然利尿を容易ならしむる者とす然



るも尙其効なく且膀胱充滿したる徴あらば宜くカテーテルを用ふべし但し大小便はかならずこれを便器に受け決して廁に上すべからずまた第一期の末若くは産出期に至ては臥しながらなさむるを法とす然れども産婆の産床に臨んだる時産機已に進で第二分娩期にある者には只小便の通利をのみ促して灌腸はまたこれを施すを要せず如何となれを已に此期に至ては假令灌腸を施すも更にまた其効なければなり

第一期の初に於ては室内の起臥歩行等總て産婦の意に任して毫も妨なしといへども子宮口哆開して已に一寸許の大きさに至ればかならず臥床に就かしめざるべからず如何となれば起坐歩行の際に於て若し胎胞破るゝときは容易に臍帶、上肢等の脱出すべき虞あるを以てなりまた産婦虛弱なるか或は經産婦にして從來分娩の經過急

劇なる習慣ある者其他惡腹、出血等あるもの、如きは皆此期の初より嚴に起坐歩行を禁して直に就臥せしむべし但し床中に於て産婦の取るべき位置は仰臥にても側臥にても第一期中は總て其意に任せて可なれども見頭いまだ骨盤内に固定せずして尙能く移動する者に於てはかならず仰臥を取らしむるを良とす若しまた一時陳痛休んで眠を催すことあらば随意に安眠せしむべしこれに由て産婦は大に其氣力を増す者なり産婦若し食を欲せむ糜粥、葛湯、軟かなる米飯、半熟の鶏卵、牛乳、脂肪少きソップ、麵包等の類を少量に與ふべし野菜類、肉類其他不消化物は宜しからず供すべからず飲料には清水を良とす麥湯、薄き茶杯もまた可なり然れども酒類および茶、咖啡等の濃きものは害あり○産婦若し此期に於て腹壓を加ふることは固くこれを禁ずべし



此期に於る腹壓は音に無益なるのみならずこれが爲或は期に先づ  
 て胎胞破れ或は痙攣性の陳痛を發して以て分娩の經過を延ばし疼  
 痛を増し甚しきは危變を起すべき害あり  
 此期に於て 屢々 内診するは宜しからず  
 是其都度子宮口の縁を刺戟して以て疼痛を増すのみならずこれが  
 爲また痙攣性陳痛を誘起することあるを以てなり故に最初の診察  
 に由て諸般の關係に毫も異常なきことを確認したらば經過少く持  
 長するも破水するに至るまでと只外診に由て陳痛の模様膀胱の景  
 況、腔内より漏出する分泌物の性質等を窺ふに止めて再び内診せざ  
 るを法とす然れども經過長に過ぐるときは時々内診を施して子宮  
 口の大小を検し以て産機の如何程までに進みしやを窺ひ兼て子宮  
 口縁は陳痛の間歇時に於て以前の如く軟かなるや否其他下向部の

體向等に變化なきやまた他に異常の有様これなきや否を検すべし  
 但し此期に於て内診する時は成るべく子宮口の縁を刺戟せざるや  
 うまた移動し易き兒頭を強く壓せざるやう注意すべしまた陳痛の  
 際緊張したる胎胞に指を加ふれば容易にこれを破るべき虞あるが  
 故内診はかならず陳痛の間歇時に於てのみなすを法とす是皆開口  
 期の内診に臨んで産婆の宜く注意すべき事件あり固より内診の都  
 度其手を丁寧に洗ひ更に五十倍の石炭酸にて嚴にこれを消毒すべ  
 きことまた言ふまでもなし  
 已にして胎胞破れて破水したらば假令以前の診察に由て胎兒の位  
 置、體向ならびに其他の關係都て明瞭なるも更に手に提く  
 内診して以て下向部の體向および其性質を定め子宮口の  
 大小ならびに其縁の硬軟を検し或は臍帶、上肢等の脱出これなきや



否を探り兼て流れ出でたる羊水の色および其量にも注意すべし就中下向部の如きは其何部なるや如何なる體向なるや等を十分明めたる後にあらざれば決して安心すべからず故に二指を以て明瞭に診察すること能はざれば時宜に由り四指若くは全手を挿入するも妨なし要するに此際異常の關係を看過して以て醫を招くべき時機を誤らざるやう注意すべし

産出期に於ては産婦を静臥せしめて陳痛の起る毎に腹壓を促し時々内診を施して兒頭の下降および其旋轉の模様を窺ひ兒頭ならびに肩胛の出づるときは會陰を保護して其破裂を防ぎ兒頭出づれば直に頂部を探りて臍帶纏絡の有無と檢し兒頭出で、後一二分時

と經るも軀幹尙出でざるときは子宮を摩して陳痛を促し或は手を以て肩胛を出だす等是なり

産出期に於ては産婦をして決して臥床を離れしむべからす其位置は仰臥にても側臥にても苦しからざれども通常側臥せしむるを可とす殊に初産婦に於て然り其他骨盤大なるが爲或は胎兒小なるが爲若くは陳痛劇しきが爲に分娩の經過疾に過ぐる虞あるものは已に開口期中より側臥せしむるを良とす然れども從來慣用せる如き中屈若くは繩の端に懸るやうなる位置は何れの場合に於ても大に害あり固く禁すべし○産婦若し仰臥するときは常に枕を高くし側臥するときはかならず胎兒後頭部の在る方を下にすべし例之第一頭蓋産に於ては左を下にし第二頭蓋産に在りては右を下にするが如き是なり但し時宜に由ては例外の位置



を取らしむることあれども是然しながら産婆の業にあらざるなり」  
 産出期に於て胎児の位置および其他諸般の關係に都て異常なきと  
 きは産婦腹壓を以て陳痛を扶くるは大に利益ある者なり固  
 より此期に至れば産婦は他の催促を俟たずして自然これを營むも  
 のなれども産婆もまた傍よりこれを促すを良とす其法即ち産婦を  
 して其枕頭に結び附けたる紐を握らしめ足を物に當てゝ以て努力  
 せしむるに在り但し産婦側臥するときには産婆は其背後に坐して腹  
 壓を促す毎に手を其背部若くは臀部に加へてこれを支持すべし然  
 れども是只陳痛の發作時に於てのみ促すべきものにして其間歇時  
 には嚴にこれを禁ぜざるべからず如何となれば此時に於て努力す  
 るは常に益なきのみならずこれが爲反て産婦を疲勞せしむる害あ  
 ればなりまた胎児の位置および骨盤の造構等に於て異常あるとき

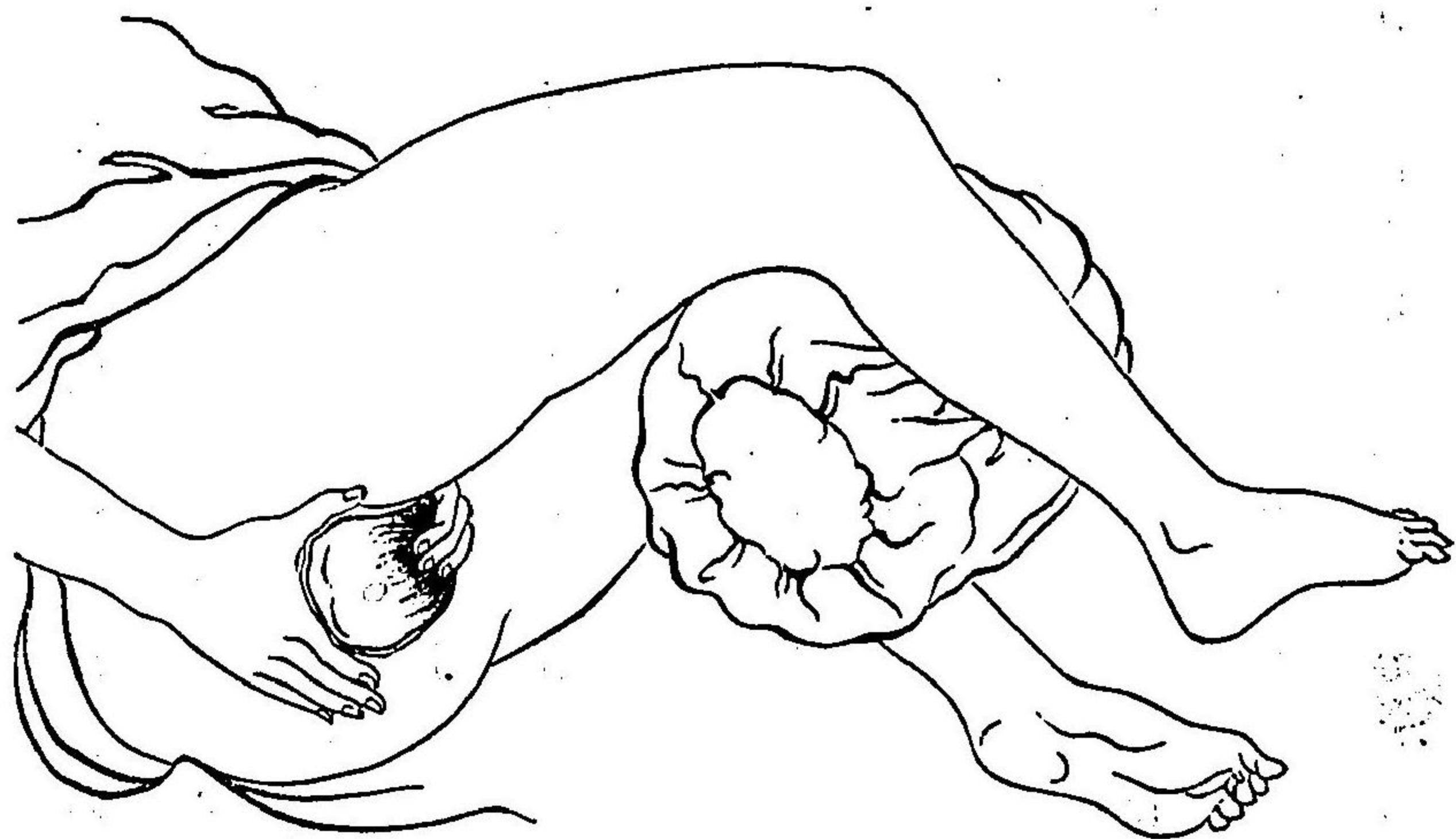
は勿論其他體質虛弱の産婦若くは呼吸困難、脱肛、脱腸等を患ふる産  
 婦には假令陳痛時たりとも腹壓は大に害あり宜くこれを禁すべし」  
 産出期に於ては産婆は陳痛の際時々指を腔  
 内に挿入して兒頭よく下向し來るやまた其旋轉常な  
 るや即ち矢狀縫合の方向漸々骨盤の縦徑に近きて小頤門次第に前  
 方に旋るや否を檢すべし但し陳痛の起る毎に兒頭著しく下降し來  
 らむ則ち以て産道と兒頭の關係其宜を得て陳痛もまた善良なる者  
 と知るべし已にして兒頭骨盤底に達して會陰球の如く緊張する時  
 に至れば仰臥せる産婦の腰下に中等大の枕子を敷き側臥せる者に  
 はこれを其兩脚の間に挟み以て豫め會陰保護術を行ふ準備を爲す  
 べし但し會陰の保護はこれを側臥に於てすること最も便利なるが  
 故に假令最初は仰臥を命せし産婦にても此に至れば轉して側臥せ



しむるを例とす如何となれば側臥に於ては常に産婆の手を運用す  
 るに便利なるのみならず仰臥に比すればまた陳痛および腹壓の勢  
 力を著しく減殺して以て見頭の陰門を撥露すること急劇ならざる  
 が故に會陰の破裂を防ぐに於て大なる利益あればなり  
 抑も會陰の破裂を防ぐべき所謂 會陰保護術は此産出  
 期に於て産婆の爲すべき職務中最も緊要の事件にして見頭已に陰  
 門に排臨して陳痛の間歇時にも尙腔内に退縮せざる時に至れば  
 其機を誤らず速にこれを行はざるべからず而してこれを行ふには  
 かならず次の三件に注意すべし三件とは則ち第一見頭をして成る  
 べく徐に陰門を撥露せしむること第二見頭の旋轉を補助してこれ  
 を骨盤誘導線の方角に導く事第三會陰の緊張を成るべく減すること  
 と是なり以上三件をして皆其宜に適はしむるもの則ち是會陰を保

護する術なり其法先  
 産婆は側臥せる産婦  
 の後に坐して其股間  
 に枕子を挟み膝を曲  
 げしめて臀部を己の  
 方に近け産婦若し左  
 側を下にして臥すと  
 きは産婆は其右の手  
 掌を會陰に貼して其  
 指を開き第四五圓  
 に示すが如く拇指を  
 右の陰唇に他の四指

第四十五圖

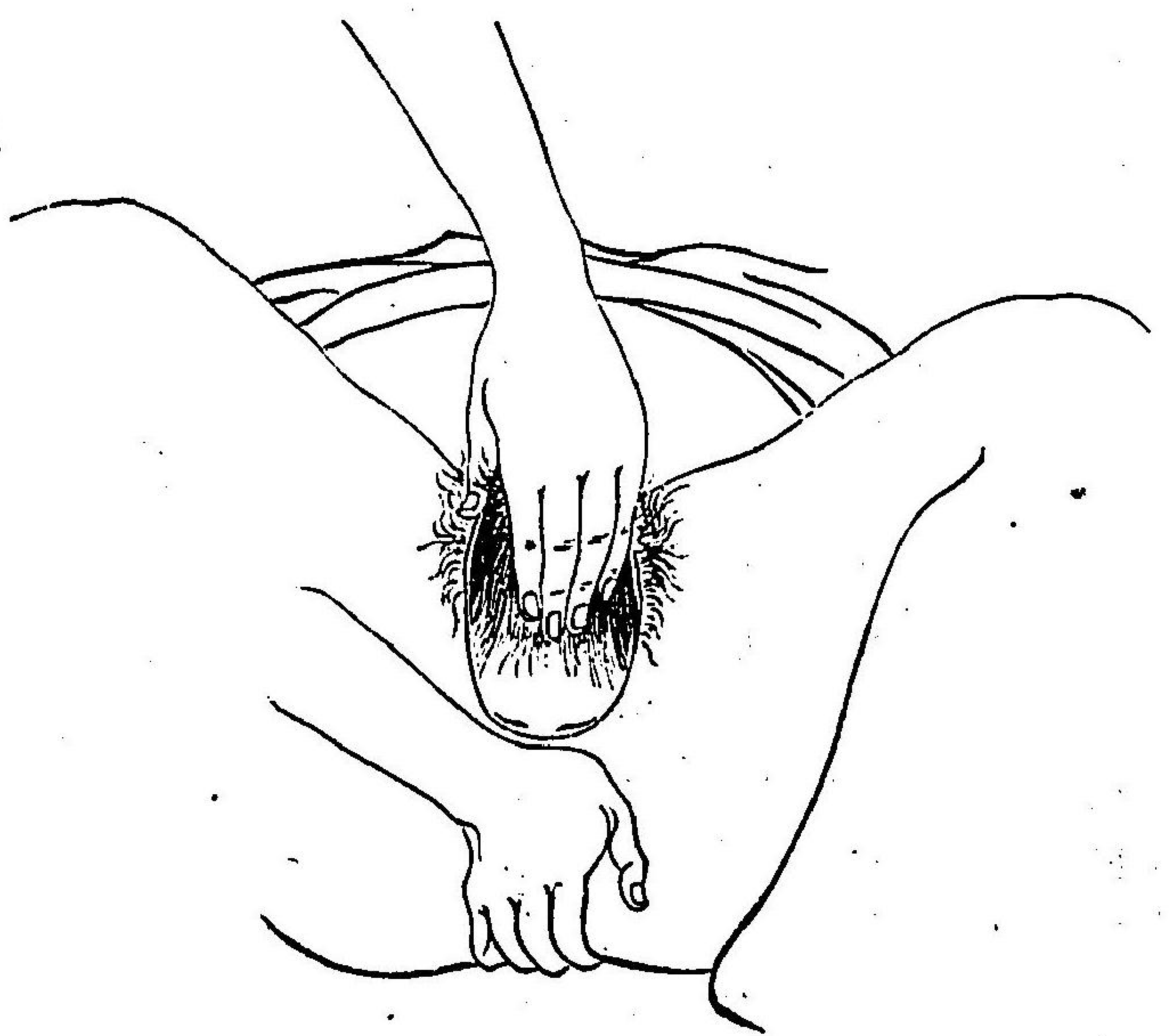


側臥に在り  
 て會陰を保  
 護するの法



を左の陰唇に加へて拇指と示指との間に存する皮膚の縁より陰唇  
 繫帯の少く顯るゝやうに爲し而して後陳痛起るに臨んで兒頭を後  
 より前方耻弓に向ふて適宜に壓し兼て左の手を前に運びて股間を  
 潜らせ其指を大頤門の近傍に加へてこれを以て兒頭を少く腔内に  
 壓し還すべき心地にて同じくこれを前方に引き旋らすべし然れど  
 も固より大頤門を強く壓すべからすまた此際産婦には其握る所の  
 紐を去り閉ざしたる口を開かしめて以て嚴に腹筋の努力を禁すべ  
 し斯の如くして成るべく兒頭の急に陰門を撥露することを防ぎ一  
 回の陳痛よりも二回また二回の陳痛よりも三回の陳痛を以て徐々  
 に撥露せしむるを良とす故に若し陳痛劇くして過急に撥露すべき  
 勢あらば産婆宜く左の手にて適宜に兒頭を壓して以てこれを制止  
 すべしまた陰唇繫帯は兒頭の陰門を出づるに従ひ次第に後方に退

第四十六圖



仰臥におい  
 て陰を保護  
 するの法

ひて手掌の下に隠るゝ者あるが故に産婆は始終これに注意し繫帯  
 の退くを追て共に其手を後方に運び以て瞬時もこれを其掌下に没  
 せしむること  
 勿れ如何とな  
 れば會陰の破  
 裂は常に此繫  
 帯より始るが  
 故に産婆斷す  
 これを目撃し  
 て其破れんと  
 する模様あら  
 ば手捷に兒頭



の撥露を制しました強く會陰を前方に壓して以て其破裂を防がざるを得ざればなり○以上側臥に就て會陰を保護するの法はまた以てこれを仰臥の時に應用すべし即ち先仰臥せる産婦の腰下に枕子を敷き少く其頭を低くして適宜に兩脚を開かしめ而して後産婆は其右側に坐して右の手掌を第四十六圖に於て示すが如く産婦の會陰に貼するか或は側臥の時に於てするが如く手を下の方より運びて拇指を右の陰唇に他の四指を左の陰唇に加へて手掌を會陰に貼し陳痛の際これを前方に向ふて壓すること前に述べたる所と毫も異なることなし

斯の如くして見頭已に陰門を撥露したるも産婆はいまだ其手を會陰より去るべからず如何となれば尋で肩胛部の出づるに方り更にまたこれを保護せざるべからざればなり故に見頭出づれば片手は

元の儘これを會陰に貼じ置き他手を以て直に胎兒の項部を探りて此に臍帯の纏絡せむること

とこれなきや否を検すべし而して若し其これあることを認めたらば軽く其臍帯を撮んで少くこれを引き出だし以て其緊張の劇を防ぎ尋で胎兒の口鼻に附着せる粘液等を丁寧に掃除すべし但し此臍帯纏絡の検査は實に緊要の事件なれども得て忘るゝことあり注意すべし

見頭出で後一二分時を経るも尙陳痛を發せざれば産婆は其手掌を平に子宮底に加へ恰も丸藥を製する時に於るが如くこれを輪に廻して強く子宮を摩擦し以て其收縮を促すべし而して陳痛起りたらば直に産婦に諭して強く腹壓を加へしめ産婆もまた其手を以て子宮底を強く下方に壓すべし然るも尙其効なく且見頭漸く紫色に變



ずるときは宜く其兩手を以て左右より平に兒頭を挟み而して後これを會陰の方に向ふて少く壓すべしこれに由て若し一方の肩胛趾弓の下より顯れ出でたるときは更にまた兒頭を前方に擧ぐれば他の肩胛は自ら會陰の前に顯れ出づべし斯の如くして左右の肩胛已に出づれば餘は自ら容易に産出するものなり但し肩胛を出ださんが爲兒頭を擱んで單にこれを前方に引くが如きは大に害あり故にかならず右に述べたるが如く只これを前後に動かして以て肩胛を出だすべし然るも尙出でざる時に於ては産婆は其示指を胎兒の背に沿ふて腔内に挿入し而して後これを其後に向ふたる腋窩の間に挟んで以て肩胛を引出だすべし○胎兒産出すれば其臍帶を截斷するまでこれを仰臥せる産婦に在ては其兩脚の間側臥せる産婦に於ては其後に仰臥せしめて臍帶を緊張壓迫せざるやう取扱ふべし

娩隨期の取扱中最も緊要なる事件は子宮の出血を防ぐと産兒の健康を保つとの二なり故に斷へず子宮を按しまた時々おれを摩して其收縮を促し傍ら産兒を窺ふて其呼吸に毫も障碍をければ臍帶の脈搏歇止するを俟てこれを截斷し娩隨産出すれば子宮の收縮十分なるを認めて後胎盤および卵膜を調査し尋で汚物を掃除して會陰を検し蓐床を作りて蓐婦を靜臥せしめ而して後小兒を入浴せしむる等是なり然れども娩隨の産出は平常自然に任ずべきものにして産婆の手を以てこれを出だすが如きは固く禁ぜざるべからず



第三分娩期即ち娩隨期に於ては始終産婦と産兒の容體に注意せざるべからざるが故産婆には最も繁忙にして最も緊要の時なり而して其要務は先産兒の呼吸を窺ひ尋で子宮の弛緩を制して以て其出血を防ぎ兼て娩隨の産出を容易あらしむるにあり故に手捷く産兒の顔面、口中等を清潔に掃除して其呼吸に障礙なきを認めたらん豫て煖め置きたる布を以て假にこれを被ふて前に述べたる如く産床に仰臥せしめ而して後産婆は直に産婦の腹を按して子宮の十分に縮小せるや或は尙一兒の残り居ることこれあきや否を定め更にまた産兒を窺ふて其呼吸に毫も妨なく且高聲を發して叫ぶこと數回にして臍帯の脈搏全く歇止するか或は臍帯に觸るべきに至れば則ち臍帯を截斷すべし其法先小兒の臍を距ること二寸許と三

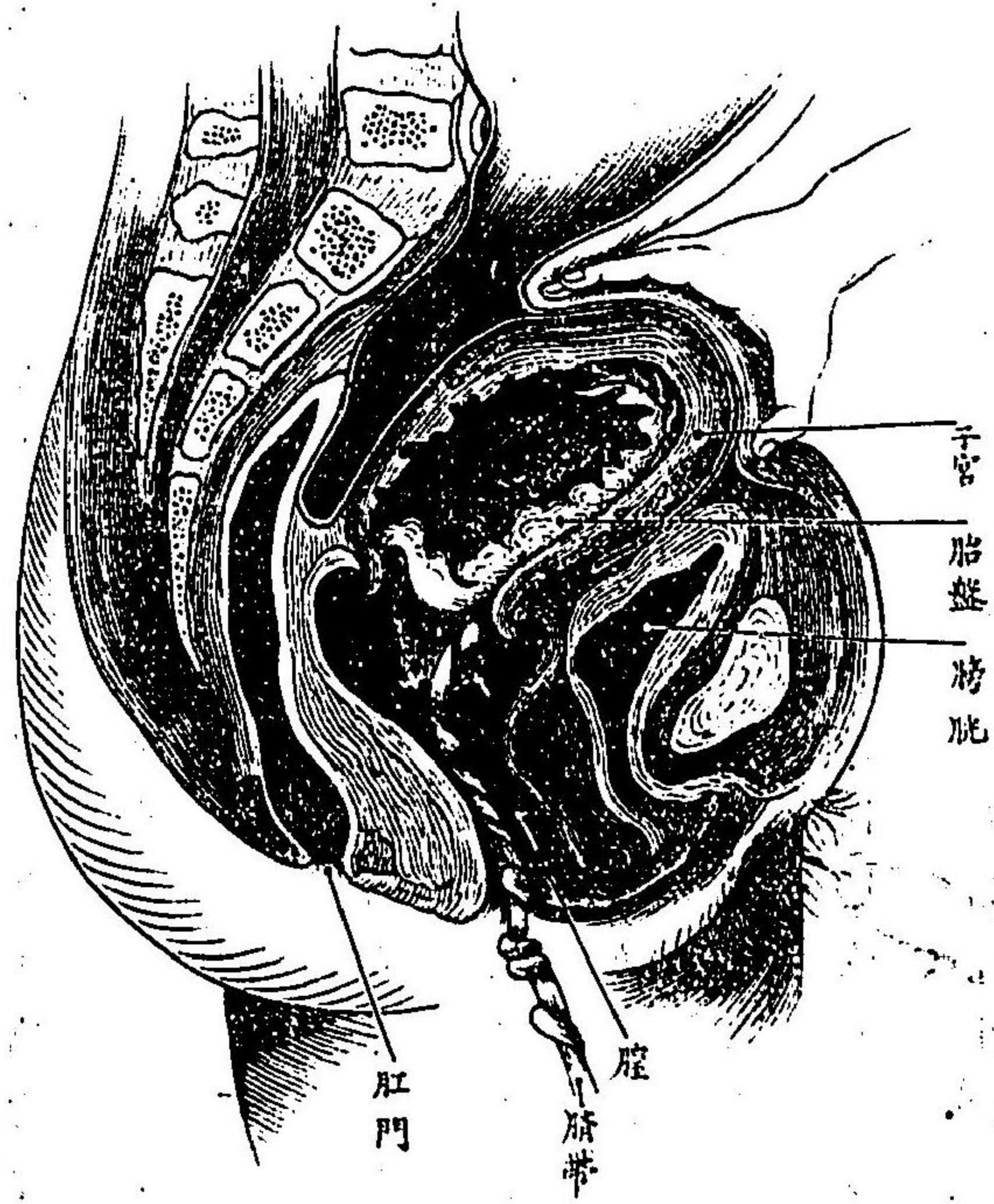
寸五分許の二箇所に於て固く臍帯を結び而して後此二箇の結紮の間、剪刀を加へてこれを截斷するにあり但し産兒はツマバタと手足を動かすものあれば誤りてこれを傷けざるやう臍帯を截斷する時はかゝらす左の手にて剪刀の尖端を覆ふべし而して後産兒は煖めたる布を以てこれを纏ひ一時産床に仰臥せしむるか或は其助手が抱かして産婆はまた娩隨の産出に注意すべし  
 娩隨の子宮壁より剝離せらるゝ時起る所の出血はあまが爲産婦の健康を害すべき多量に至らざるを常とそるゝと勿論なきとも此際若し産婆の注意到らずして其取扱法宜しからざるときはまた産婦の性命をも危くすべき大出血を起すゝと甚だ堪からず且其出血たるかならずしも腔外にのみ漏れ出づる者にあらすして時々内出血と名け子宮腔内に滲溜して外よと著しく漏れざるとあり故に深



く注意せざれば産婦の危に至るまでも其出血あるを知らずして看過することあるべし但し子宮腔内に出血したる時は子宮再び増大して其底部漸く上方に上り且子宮軟かになりて産婦の顔色蒼白に變するを以てこれを知ることを得べし是故に産婆は娩隨期に於ては屢々陰部を檢視して出血の多少を親ひ斷へず子宮を按じて其模様を注意し兼てまた適宜にこれを摩擦を加へしむべし而して若し陰門より多少の出血をなして子宮速に縮小し最初は其底部尙臍上に達せしもの今や固き球形に變じて著しく臍下に下りしことを認めたらば是則ち胎盤の全く子宮壁より剝離せられて其大部は已に腔内に出でたるものと知るべし然れど

第四十七圖

も産婆は尙子宮の按摩を止むべからず其傍らまた陰部を檢して若し多量の出血なきときと成るべく自然の産出を俟つを法とされども右の如く子宮著しく縮小したる後十五分乃至二十分を経るか或は假令縮小せざるも胎見産出後二時間を経て尙娩隨の出べき模様なければ法に



娩隨を壓出する法



従ふてこれを壓出すは効なし其法は則ち先子宮を摩擦して陳痛  
 を促し其硬固となるを埃て腹壁より子宮底部を握み第四十七圖の  
 如く拇指を子宮の前面に他の四指を其後面より加て強く子宮を推  
 と共にあるを薦骨の凹面に向ふて壓するにあり此法少く習熟すれ  
 ば大抵一回の壓を以て容易に胎盤を出し得るものなれども若し一  
 回にして効あきときは數回反復すること勿論なり然れども毎回かな  
 らず陳痛の起るを俟てこれを行ふべし已にして若し胎盤は陰門に  
 顯れ出づれどもこれに連續する所の卵膜尙子宮壁に懸りていまだ  
 全く産出し了らざるときは宜く兩手を以て其陰門に顯れ出でたる  
 胎盤を握み徐々にこれを旋らして卵膜を細の如く撚轉すべし然か  
 するときは毫もこれを引ざるも卵膜は其撚轉せらるゝに従ふて自  
 ら剝れ出る者なり然るに産婆若し其法を誤りて或と胎盤を握みこ

れを引くが如きことあらんか卵膜は忽ち破綻して子宮内に残り以  
 て後の大害を醸すことあるべし○分娩ならびに産褥の経過最も安  
 全ならんことを欲せば宜く娩隨の産出を自然に任すべし之れへど  
 も若し此期に於て大出血を發したらむを反して成るべく速に  
 娩隨を出ださるべからず故に子宮の内外に關せず平常よりも著  
 しく多量の出血を認めたらば須臾も自然の産出を俟つことなく直  
 に強く子宮を摩擦して先其收縮を促し而して後片手若くは兩手に  
 て強くこれを壓して急に娩隨を出だすべし已にして 娩隨 産  
 出 するも 産婆 之 尙 續 び て 子 宮 を 摩  
 擦 し 其 十 分 に 收 縮 せ る を 認 む る に  
 あ ら ざ れ ば 決 して ま た 手 を 子 宮 よ  
 り 離 す べ か ら ず 但 し 何 の 場 合 に 於 て も 娩 隨 を 出 だ



すにはかならず腹壁よりあきを 壓し出すべし決して臍帯を取  
 て引出だすべからず況して四指若くは全手を挿入して子宮腔より  
 あきを掴み出だすが如きをや  
 娩随全く産出したれをあきを豫て備置きたる器に納め而して後直  
 に小腹を按じて子宮の模様を検すべし此時若し子宮十分お收缩し  
 て大さ拳子の如く硬きこと石の如くならば更にまた大なる出血な  
 きを常とす是に於て産婆は再び娩随を取出だし其翻轉せる卵膜を  
 舊位に復して 丁寧に これを 照し 卵膜、胎盤  
 共に全きや或は其一部子宮内に残りたるが爲不足する所となきや  
 否を吟味して確と不足なきを認めたらば更にまたこれを器に納め  
 て醫の來診ある場合において其來るまで保存し置くべし而して  
 後産婆は布片若くは脱脂綿を温かなる五十倍の石炭酸中に浸して

軟かよ痔瘻の陰部を掃除し痔瘻若し側臥するるときは少く臀部を舉  
 げて後より 會陰を 検し 其破裂なきや否を吟味すべし  
 然れども此時強て臀部を高くそべからそまた劇しく陰門を開くべか  
 らそ如何となれをあきが爲腫ふよび子宮は空氣吸入して以て害を  
 來そあどあきあれをありまた仰臥せる痔瘻に就て陰部を検するに  
 と其膝を曲げて兩脚を腹に接すれば容易にあきを目撃すること  
 得べし而して若し會陰に大なる破裂あるあきを認めたらば速に醫  
 を迎ふべきあど勿論にして決して鶏卵の白身杯を塗りて以て安心  
 そべきものよあそ次に産婆は成るべく痔瘻を動かさいるやうに  
 して汚れたる布片敷物等を取り除きて煖めたる新しき敷物に換へ  
 腰下よは折り重ねたる布片を敷き脱脂綿若くは布片の清潔なるも  
 のを以て陰部を覆ひ被衾を厚くして以て産床を其儘褥床に供する



を便とす然れども若し別に褥床を設くるときと恐露の爲蒲團の汚  
れざるやう其上敷の下よとかあふを産床に於るが如き油紙若くは  
護謨布を敷き而して後あきを産床の傍に運びて靜に褥婦を移すべ  
しまた衣類の汗染みたるが爲これを交換する時の如きも成るべく  
褥婦身體の冷へざるやうにまた動ざるやうに取扱ふべし然れども衣  
類を交換するにはかならず多少の運動を免れざるが故其汚甚じか  
らざれば假令瑣細の不快感を感じるも産後直にこれを換へざるを良  
とす事情若し止を得ざれば布片を煖めて衣服の下に入れこれを以  
て假に肩背胸腹を被ひ二三日の後を俟て靜に新衣に交換すべし其  
他褥婦の腹には幾重にも折り重ねたる布片を貼し分娩の經過早急  
なりし者には更に其上に軽く腹帯を施すを良とす而して後褥婦に  
は海き茶、糜粥、ソップの類を煖め其意に隨ふて適宜にこれを與ふべし

○斯の如く褥婦の處置を果り且子宮の内外共に出血なきを確認し  
たらむ此に於て産婆はまた産兒の初湯に移るべし然れども事に慣  
れたる助手あるときは已褥婦の處置を始末する間に初湯の事は固  
よりこれに任せて可なり但し小兒取扱法の詳細なることは卷の四  
第五章にあり就て見るべし

産婆は褥婦および小兒の處置を盡く始末したるも直に家に歸るべ  
からず其後尙二三時の間褥婦の傍にありて時々其小腹を按じて子  
宮の模様を窺ひ陰部を検して出血の有無を定めまた始終全身の容  
體に注意して其安危を察し褥婦若し睡に就かば意に任せて安眠せ  
しむべし已にして全身汗を發し子宮球の如く固く收縮して其底部  
を小腹に觸るゝに至れば更にまた出血および其他の變症を發すべ  
き恐なきを常とす故に歸宅するも苦しからず然れども褥婦を辭す



るに先つて更にまた膀胱を検するを萬全とす而して若し膀胱に尿満るときは股間に便器を加へて排尿を促し自利し難きときはカナルを以て十分これを漏らして後歸宅すべし

以上尋常の頭蓋位に就て産婆の取扱ふべき要件を述べたる者なり前にも記載せし如く此位置の産にして経過順當なる者は固より醫の來診を必要とせざれども其経過中若し多量の出血あるか或は上に記載せし方法に由て娩隨を出だし能はざるか或は産出したる胎盤および卵膜に於て足らざる所あるか或は大なる會陰破裂を生ぜし時の如きは速に醫の診察を請はざるべからず

其二 頭蓋産第二類れよび前顛産の取扱法

頭蓋産の第二類にして兒頭尙骨盤腔にあるときははこれをして平常の頭蓋位に變ぜしめんが爲産婦に命じ

て先胎兒後頭部の位する方を下に側臥せしむべし然れどもこれを久ふして到底位置の變じ得べき模様なければ轉じて其反側に臥さしめんが爲小心以て會陰を保護すべし

産婆内診を施して大顛門を前方に觸るゝも兒頭尙骨盤腔にありて所謂頭蓋位の第二類たるべき時又於て之宜く前述べたる規則に従ひ産婦をして胎兒後頭部の位する方を下にして側臥せしむべし例之第一體向にして後頭部母の左後方に在るときは左を下にして第二體向にて右後方に在るときは右を下にするが如き是なり如何とあれば兒頭尙骨盤腔にある場合に於てはこれが爲小顛門次第に前方に轉じて遂に尋常の頭蓋位に變ずること尠からざればなり然



れどもこれを久ふして位置の變じ得べき模様なきのみならず大頤門反て益々前方に轉じ到底前頤位を以て陰門を撥露すべき景况あらば直に産婦の位置を轉じて大頤門の位する方を下に側臥せしめ而して後頭蓋産に於るより更に一層の注意を加へて會陰を保護すべし如何となれば此位置の産に於ては會陰を緊張すること甚しきが故に其取扱法宜しからざるときは大なる破裂を生じ易ければなり但し頭蓋位の第二類にてもまた前頤位にても分娩の経過稍持長するときは速に醫の來診を請ふべし

### 其三 顔面産の取扱法

顔面位に就て注意すべきことは其第一期に於て胎胞の破裂を防ぎ第二期に於て會陰を保護する時に當り

### 殊に精密の注意を要すること是なり

第一期に於て胎胞の破裂を防ぐには産機の初より直に産婦を安臥せしめて身體の動搖を禁じ且其位置は側臥にして胎兒の頤の位する方を下にせしむべし固より内診を行ふに於て強く胎胞を壓すべからざるは勿論其必要なければ屢々内診せざるを良とすまた破水の後に於ても内診を屢々すれば爲に眼口等を毀傷するの虞あり慎むべし

此位置の産に在て會陰を保護するには前頤産に於るより更に精密の注意を要すること無論なれどもさればとてまた頭蓋位に於るが如く強ひて兒頭の撥露を緩慢ならしむべからすまた強く兒頭を耻弓に向ふて壓すべからす如何となれば此位置に於て兒頭の陰門を撥露するときは其頸部劇しく耻弓に向ふて壓迫せらるゝが故に兒頭



の出づること緩慢なれば爲に胎兒を害するの虞あればなり故にまた顔面位の産にして経過少く緩慢なる場合に於てはかならず醫を迎ふを怠らす殊に初産婦に於ては最初より直に醫を招くの安全なるに若かすまた産出したる小兒にして産瘤の大あるが爲顔面醜貌を呈したる者は直にこれを産婦に示すべからず若し止を得ずしてこれを示すが如き場合に於ては其不日にしてかゝらす治すべき者なることを豫め説諭し置くべし

### 乙 骨盤産の取扱法

骨盤産には直に産科醫を迎ふと法とす而して醫の來るまで産婆自ら適當の處置を施し力めて胎兒の危害を防禦せざるべからず

骨盤位の産にして胎兒の肩胛および頭部の産出緩慢なるものは速に醫療を施すにあらざればおそきを救ふおと能とそ然きども其肩胛および頭部の産出緩慢なるやならざるやと豫めおそきを定るおと能とざるが故産婆若し其骨盤産たるおとを發見せむかならず産機之初より醫を迎へざるべからず如何となきを醫療を要する時又追りて始めておそきを醫と訴るも醫の來るまでよと時機已に去りてまたおそきを救ふよ由なりをなり就中初産婦に於ては殊に精密の注意を要するおと勿論假令經産婦ても其骨盤若くは軟部の産道狭小なるか或は小兒の體格大なるが如き者よと同じく小心注意せざるべからず此又醫の來るまで産婆の宜く取扱ふべき事件を記載せむと則ち左の如し

● 開口期に於ては其経過の成るべく持長とべきやう取扱ふ



べし例之産婦を静し側臥せしめて嚴に腹壓を禁じ内診を屢くせしめて勉めて胎胞を保持する如き是なり産婆若し内診して胎胞内に腎部を觸せしめて足のみを觸せ外診にてもまた腎部は側方より偏りて子宮底部は其反対側より傾きたるを認めたらむ宜く産婦をして腎部の偏りたる方を下し側臥せしむべし是能く足位を轉じて更に害の小ある腎位と爲すべき効あるものあり

●産出期に至るも醫いまだ來らざるべきとき宜く産婦を仰臥せしめて腰下小形の枕子を敷き以て後に行ふべき手術を便せしむべし然れども産婦若し臥臺の上に臥たるとき之所謂横床を以て手術は最も便利なる位置と爲す但し横床とて則ち産婦の腎部を轉じてあそを臥臺の横の縁に運び頭を高くして腰下に枕子を加へ左右の足を曲げてあそを二人の助手に持たしむるか或は臺下の左右より

設けたる二個の椅子に載せ其中央より更に術者の坐すべき椅子を据へ其前よりまた陰部より流れ出づる所の汚物を受くべき器を備ふる者は是なり而して此期に於てもまた胎兒の腎部母の骨盤内に在る間之成るべく腹壓を禁じ産婆もまた妄り胎兒の腎部若くと足杯を取りてあそを引くが如きあそをわするべからず如何となむあそが爲胎兒の正しき體勢を損して上肢を頭部の兩側より轉動せしむるあそあるが故に上肢および頭部の産出を妨て以てますく胎兒を害するのみよして益する所毫もあそなげをなすなり○已として胎兒の腎部將に陰門を撥露せんとする時に至れを固より會陰を保護すべきあそ無論なきともまた頭蓋位に於るが如く強く會陰を壓すべからず而して臍部已に出づるを産婆と其拇指と示指とよて軽く臍帯を撮み少くあそを引出だして以て其



緊張を弛むべし若しまた兩脚の間に臍帯挟まりて胎兒おきお跨り  
 出づるとき之直し其背に沿ふたる臍帯の端を撮んでおきを引弛め  
 尋で後方又向ふたる臀部の下を潜らせて以ておきを外すべし  
 臀部出でし後已し臍の上端まで産きたる時に至るも母いまだ來ら  
 ざれば産婆とおきまでの處置を全く一變して成るべく速し胎兒の  
 産出そべきやう取扱ふべし即ち陳痛の起る毎に産婦をして強く腹  
 壓を加へしめ産婆もまた傍より子宮を摩して盛し陳痛を促し且陳  
 痛起らむ直し兩手を以て子宮底部を掴み適宜におきを壓するが如  
 き是あり而して上肢および肩胛已に出づきを速かに兒頭の産出そ  
 べきやう取扱ふべしとゆへども上肢若し頭部の側方に挟まりて胸  
 部と共に出でるとき之先おきを出だその術を施さるべからず  
 其法温かなる布片にて軽く胎兒の軀幹を包み而して後其腹に相對

第四十八圖



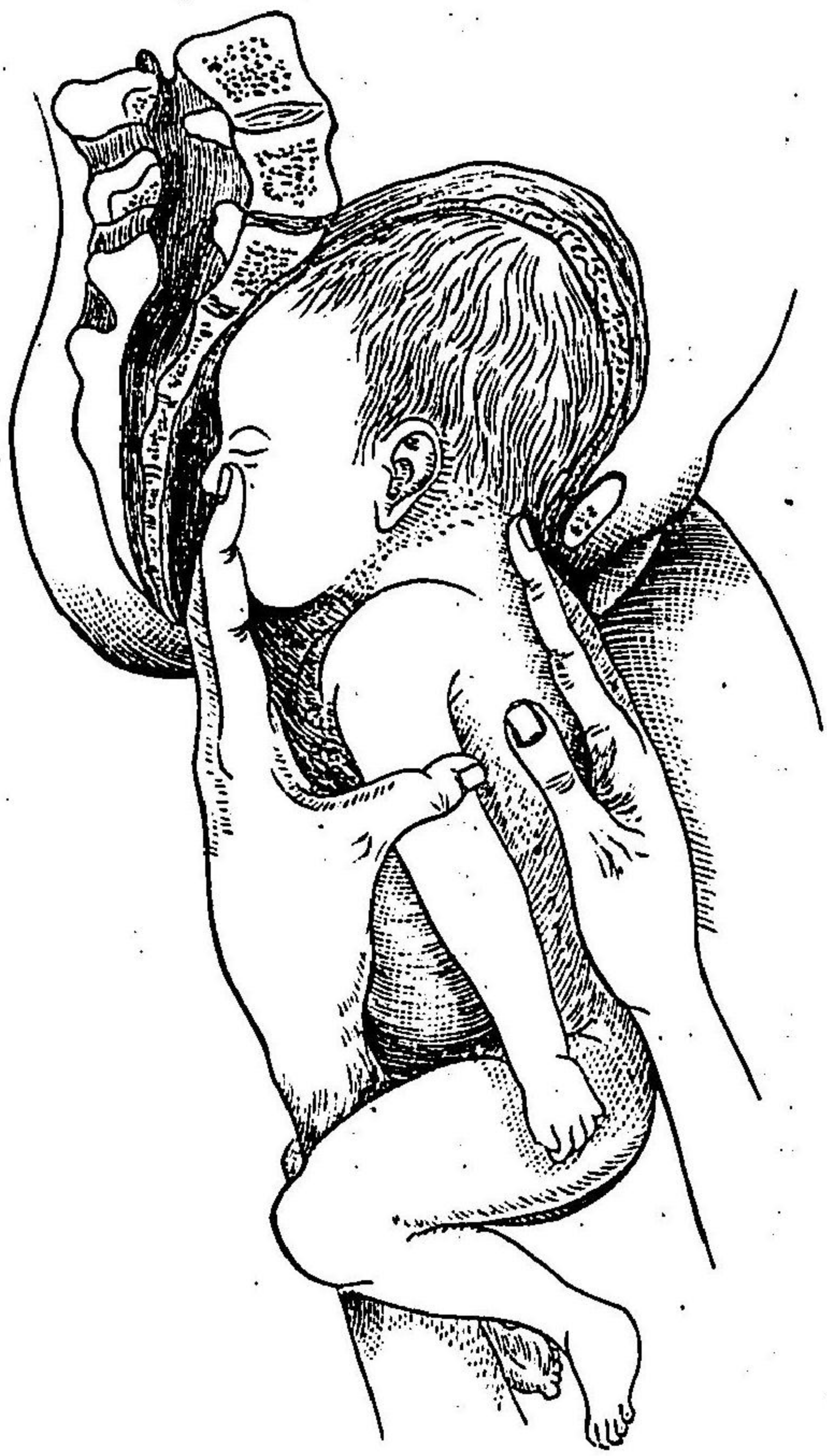
上肢を出し  
だすの法

せる産婆の手を以て臀部若くは兩足を保持しておきを上方より擧げ  
 尋で胎兒の背に相對せる手の示指と中指を陰内に挿入しておきを  
 其後方に向ふたる肩胛の上より潜らせて肘關節の所まで達せしめ更  
 に拇指を腋窩の下より入きて以て以上の三指にて第四十八圖の如く



上膊の全部を握り而して後あきを顔面の前より潜らせ  
 て 外方より運び出ださるゝあり斯の如くして一肢已に出づるを  
 更よ手を持ち交へて他肢を出だすゝまた初の如し然れどもあき  
 を出だすゝとかならそ右より述べたるが如く顔面の前を潜らせて他  
 側の胸邊に運び出ださるゝるべし然らそして單よあきを下  
 方より引き出ださんどそきを爲よ上膊骨を挫折するゝ多し注意す  
 べし○上肢の出づるゝ其人工より將た自然より出ださるゝ已  
 兩側共に産出しゝるゝときと成るべく手捷く兒頭を出ださるゝか  
 らず但しあきを出だすの法と先胎兒の背より相對する手を以て見體  
 を上方に擧げ尋て其顔に相對する手の示指と中指を臍内より挿入し  
 て鼻翼の兩側より加へあきを以て胎兒の顔を後方より旋らし胸を胸  
 引寄せて第四十九圖の如く兒體を其手の前膊より匍匐せしめ更よ他

第四十九圖



兒頭を出だすの法

の示指と中指を項窩より貼し而して後此兩手を以て兒頭を徐々  
 後より前より旋轉して運び出だすに在り但し此際兼て産婦を命して強く腹壓を加へしめ善き助手あらばまた  
 あきをして更に腹壁より兒頭を下方に壓せしむれを大よ其産出を



容易からしむるものなり然れども兒頭を出ださんとして單にあそを前方に引くと大に害あり故にかならず右に記載せしが如く自然産出の機轉又模して只あそを後方より前方に旋轉せし然るときと毫もあそを引かざるも會陰の前より咽部、顔面、前頭、顛頂等順次相尋で自ら顯き出づる者なり

産婆若し以上の法に従ふて上肢若くと兒頭を出ださんとするもあそを出だし難きときと宜く手術を中止して醫の來るを俟つべし若し然らそして安りに手術を施るときと適に胎兒に害を加ふるのみならず併せて産婦を害することあるべし但し斯る場合も於てと胎兒は到底救ひ得ざるものと覺悟せざるべからそ

● 娩 隨 期 に於る取扱法と固より頭産に異なる所なきが故に更にまた贅言を要せし産婆若し手術の爲腔内より屢く指を挿入せし

ときと産後直に五十倍の石炭酸を以て腔を洗滌するを安全ありとす

〔丙〕 複産の取扱法

複産の取扱法と概ね單胎分娩に異なる所なし只第一兒産出の後も於て更に注意の密ならんことを要するのみ

複胎之前にも述べたるが如く單胎に比すれば概して異常の位置、體勢等を取ることも多しとんども就中第二兒も於て然りとするが故に第一兒産出の後も更に精密の内診を施して第二兒の位置、體勢および體向を定め臍帶、四肢等の脱出なきや否を檢とべしまた臍帶の結紮と單胎に於るが如く各兒共二箇所にて施すべきと更に



言ふまでもあけれども殊に第一兒の臍帶と二箇所共同く堅固く結紮せざるべからず如何とすれば二兒多くと胎盤を共にするが故も若し第二の結紮堅固からざるが爲まれより出血するが如きことあらば其出血は即ち第二兒の血液あるを以てこれをして死に至らしむることあればなり蓋し第二兒の産出は通例第一兒産出の後須臾にしてこれあるを以て産婆は手摺に諸般の準備をなし第一兒の産出期と同様にこれを取扱ふべし娩隨期の取扱もまた固より單胎分娩に異なることなし雙胎にても品胎にても胎兒の残らす産出したる後に至りて法の如く取扱ふべし

前編卷の三終

産婆學前編卷の四

平常の産褥ならびに産婦および嬰兒の取扱法

○第一章 平常産褥の經過

産褥とは乳房を除くの外妊娠および分娩に由て生ぜし所の全身ならびに局處の變化産後日を経て殆ど舊に復する間といふ即ち娩隨産出の後と以て始り六週の末に至て終る

卷の二第六章初妊と經妊の鑑定の條下に於て述べたるが如く妊娠および分娩の爲生ぜし所の諸般の變化中産後全く消滅し去らすして生涯多少其痕跡の遺り存すること當然なれども他の著明ある所



の變化は産後漸く消滅して六週の後に至れば殆ど舊形に復す而して此間を産褥といひ其婦人を褥婦といふ然れども獨り乳房はこれに反して産褥中舊形に復せざるのみならず此期に至て更に變化の度を進め以て嬰兒の榮養發育に最も適應する所の食物即ち乳汁を製出す此に産褥中全身および局部變化の模様を擧ぐれば則ち左の如し

〔甲〕 産褥中全身の變化

産褥に於る全身の變化中最もなるものは脈緩にして體温稍進み皮膚滋潤して口渴し産後數日食氣減して大便不利する等是なり而して精神には著しき變化なし

褥婦は産後直に疲勞倦怠して稍惡寒を覺へ須臾にしてまた身體温まり陰部に焚くが如き微痛を感じるの外毫も違和の覺ふべきものなし忽ちにして睡に就き睡眠中全身汗を發し醒め來れば疲勞倦怠ともに去て氣力増し精神甚だ爽快を覺ふ脈は最初稍頻數なるも此に至れば次第に減して緩徐となり體温は常人に比すれば稍高しといへども全經過中三十八度二分以上に上ることなし皮膚は温かにして始終滋潤し最初七八日の間日に二三回の發汗ありこれを褥汗といふ但し産褥經過の善き一徵なり褥汗の外褥婦はまた惡露授乳等の爲多量の水分子を排泄するがゆへに口渴して頻に飲を欲すれども食氣は二三日の間少く減し大便の通利もまた其間これなきを常とす然れども小便には殆ど増減なく或は稍増すこともありまた最初の間は膀胱の充滿するにも拘らず毫も尿意を覺へざること



屢々これあり

〔乙〕産褥中局處の變化

生殖器に於て變化の最も著しき所は子宮にして産後尙陳痛様の收縮を起して次第に縮小し其漏らす所の悪露は初赤色なれども七八日の後に至れば變じて白色の粘液となる腔れよび外陰部等もまた數週にして舊形に復すれども乳房はふれに反し産後二三日にして遠に腫脹緊満して乳汁を出だす而して月經の再來するは授乳すると否らざるによりて早晚一樣ならず

●子宮は妊娠中變化の最も著しき所なるを以て其舊に復するに方

ても從ふてまた變化の大なること勿論なり即ち分娩後直にこれを測れを其重さ百八十餘なれども四箇月の後には減して纔に十々に過ぎを而して子宮の斯く速に縮小する所以のものは蓋し妊娠中増殖せし粘膜、筋組織等急に崩潰して再び血中に吸収せらるゝと惡露と共に體外に排泄せらるゝとに由るといへども其初期に於て之ふるに後陳痛と名くる所の子宮收縮に基くものあり 後陳痛とは産後に於る子宮の收縮にして恰も分娩時の陳痛に於るが如く子宮の時々硬固となりて疼痛を發するをいふ而して其甚だしきとあそが爲婦の安眠をも妨ぐるに至るあそあそとも通常分娩時の陳痛に比すをば甚だ微弱にして且其發作短く間歇と長く時を経るに從ふて次第に消滅し久しきも五日以上に亘るあそなし概して後陳痛の強弱は分娩經過の長短に正反對をなし其長きものに弱くし



て短き者に強し故に初産婦には甚だ微弱にしてゐる者甚しと云へども經産婦に於て之多少の疼痛を覺へざる者殆どあきなしまた按腹および哺乳は能く後陳痛を促すものあり故に自ら乳を授くるものと其授けざる者に比しその心を産褥の経過速かにして且善きものとす ○子宮の大きさは分娩後直ふるを觸るれを殆ど手拳の如くなれども須臾にして再び増大し十二時間の後に至るば其底部上行して殆ど臍窩と耻骨縫際との中央若くは稍其以上に達し尋でまた次第に縮小して二週間の後に於て之遂に腹壁よりあきを觸るべからざるに至るまた産後直に内診をば子宮口および頸管は共に哆開して容易に指を挿入することを得子宮口縁は甚だ弛緩して殆ど膜の如くなれども産後已に八日を過ぐれば明

かに子宮腔部の形に復そ然れども其形尙大にして短く且軟かにして數個の切痕あり是分娩の際生ぜし所の裂創にして其痕痕は生涯消滅せざるものなりまた子宮の内面は娩隨の剝離せしが爲最初普く創面を呈し殊に胎盤の附着せし所は最も著しく且甚だ凹凸不平にして多量の液汁を分泌せざるも産褥中再び平癒してまた舊の如く全く平滑となるなり而して此創面より分泌する所の液汁を名けて惡露といふ初二三日の間は殆ど純血にして其中に脱落膜の殘片および腔の粘液を混ざるが故に少く粘稠な色ども三四日を經れば稍褪色して其質もまた稀薄となり恰も水中に血液を混じたるが如し而して産後七八日を過ぐれば更に變じて粘稠白色の液となり少量の膿を混じり但し此分泌は子宮内面の平癒する時に至て止む者にして自ら授乳する人に在て之産後三四週にして全く停止そ



きども授乳せざる人に於ては尙久しきに亘るものなり

●外陰部、會陰および膣の弛緩、腫脹等は産後數日にして舊に復し其陰唇繫帶、膣口および尿道口の近傍等に得て生ずる所の創傷もまたこれを不潔にせざれば久しからずして平癒す

●乳房は妊娠中より已に腫脹して初乳を分泌せざるも其變化といまだ甚しからず而して産褥中に至て始めて變化の極度に達する者あり即ち産褥の第二日乃至第三日又於て腫脹速く増進して感覺過敏となり率くが如くまた刺そが如き疼痛を發し感覺の強き人に在ては其痛延ひて腋窩及ぶるもあり然れども其翌日に至て乳汁の排泄増進するに従ひ腫脹再び弛んで疼痛もまた治するを常とす但し産後直に分泌せらるゝ所の液汁とあなじく初乳なるを以て濁りたる水の如く濁くして黄線を混し乳糖および鹽類を多量に含んで

稍下劑の作用を有す故に初生兒これを飲めば胎糞を排泄するの効あり然れども時日を経て乳腺の分泌増量する時に至れば其質變じて眞の乳汁となり帶黃白色にして成分の混和平等なり蓋し小兒に乳を授くること屢々にして小兒のこれを哺することまた強きときは隨ふて乳汁の分泌し來ること愈々速にして其量また益々大なるものとす

●月經は産後尙續ひて閉止するものと勿論なれども其時日に於てと自ら乳を授くると然らざるに依て大に長短の差異あり即ち授乳せざる人に在ては産後四週乃至六週にして月經再び來きども自ら授乳する人には其閉止すること通例十箇月内外とぞ然れどもまた其授乳するにも拘らず産後數週にして已にこを來すものと甚だ趣からず



○第二章 産褥の鑑定

産褥の鑑定は前章に記載せし變化の中に就きれば乳房、子宮、膈れよび外陰部の模様によつてこれを爲すことと得べし

産褥の鑑定は前章に列擧せし諸の變化を検し得てこれを爲すべきこと無論なるが故に更にまた記載するを要せざれども産後いまだ久しきを経ざる者に就き其要點を擧ぐれば即ち左の如し  
乳房腫脹して乳汁を分泌し腹壁甚だ弛緩して褐色若くは赤色の妊娠線を呈し子宮は小腹に在りて硬き球形をなし外陰部浮腫弛緩して陰唇繫帶、會陰等に裂創を生じ膈は擴張して甚だ柔軟平滑に子宮口哆開して容易に指を挿入し得べく且其周縁に切痕あり膈部は軟緩

して子宮腔より一種の臭氣を帯びたる惡露を漏らす等是なり但し分娩後數月若くは數年を経過せし者の鑑定は卷の二第六章に詳かなり

○第三章 嬰兒の發育

小兒生るれば直に高聲を發して叫び尿を漏し尋て胎糞を下すと二三日飽けば則ち眠り餓ゆれば則ち啼く生後二三日にして皮膚微黃を呈し五六日にして臍帶落ち八箇月にして初て齒を生ず

小兒生れて直に高聲を發して叫ぶ是呼吸の始なり須臾にして尿を漏らし尋て眠に就くこと六時乃至十時間にして覺てまた啼く是餓を訴ふるなり此時授けたる母の乳汁は嬰兒を養ふの外尙瀉下の効



あるを以てこれが爲其腸内に滯ふる所の大便を下すべし是則ち胎糞にして其色黒く或は暗緑色の粘稠なる糞塊なれども二日乃至四日を経れば變じて硫黄色の大便となり一晝夜に二回乃至四回の通利あるを例とす○小兒生れて後二三日を経れば輕微の黃疸を發して皮膚少く黄色を呈するもの甚だ多し是然しながら病と名くべきものにあらざるが故に小兒の容體に於て別に異なる所なく十日内外を経れば表皮剝脱して自ら消散するを常例とす然れども此際小兒煩躁啼泣して安眠せざる者はかならず病あり速に醫の診察を受けしむべし○臍帯は時を経るに従ふて次第に乾燥し其附着部に膿を醸して數日の後自ら脱落す而して後其跡に結ぶ所の癩痕は則ち是生涯殘る所の臍なり但し臍帯の脱落するは生後第六日を以て最も多しとすれども罕には二日にして已に落ち或は九日に至て始めて

脱する者あり而して斯く臍帯の脱落するに至るまでの小兒を名けて初生兒といふ○小兒は生後八箇月にして中央の切齒二枚を下顎に生じ尋で上顎にまた二枚同名の齒を發するを始として二年の末若くは三年の初に至るまで上下各々十枚の齒を生す即ち前方に四枚の切齒其左右に二枚の大齒また其左右に四枚の臼齒是なり故に上下合して二十枚これを乳齒といふ七八歳の頃より漸々脱落して以て永久齒と交換す

○第四章 蓐婦の養生によび其取扱法

蓐婦の養生は精神をよび身體を靜にし感冒を防ぎ清潔を旨とし衣服を温めにして飲食を節し二便の通利を整ふる等其法概ね妊婦産婦に異なることなしとい



へども就中授乳の事は其養生に最も肝要なり而して授乳中はまた精神身體の動靜より衣食住の事に至るまで堅く養生の法を守らざるべからず

●精神の感激は孕婦に大害あり殊に平素事物に感動し易き者は産褥中些細の刺戟より忽ち恐るべき病を誘起することありゆへに褥室には雑踏喧騒を避けて成るべく閑靜の所を擇び産後八九日の間は多人數の來訪を謝絶し殊に孕婦の意に通せざる人の如きは嚴に忌むべからず其他總て喜怒哀樂の感情を激するが如きは其事物の何たるに關せず決してこれを見聞せしむべからざるものと猶卷の二第八章に述べたるが如し

●身體を靜よそると温かよそるとの二件と産褥の經過を安全なら

しむるに甚だ緊要なり故に生來壯健の人にては産後八九日の間は専ら靜臥を旨として決して起立せしむべからず孕婦若し赤子を慎ますして或は早く褥床を離るゝが如きことあらんか爲し子宮膈等の結合を弛緩ならしめて其位置を變じ惡露もまた久しく持續するのみならず時として恐るべき出血を來しまた褥汗を閉止せる等様様の害も由て後日生殖器種種の病を誘起することあるべし故に孕婦或は二便を利し小兒を抱き衣服および敷物を交換するに方ても成るべく其動搖を避けまた身體の冷へざるやう注意するは勿論衣服および敷物の如きと若し褥汗惡露等の爲に甚しく滋潤汚穢ならざれば二三日の間赤子を換へざるを良とせ而して赤子を交換するときはかならず温かにしてよく乾きたるものを以てし臥床の交換を要する場合にもまた其新床を煖めてこれを舊床の傍に運び産



嬰自ら褥婦を助けて静みあき又轉臥せしむべし但し衣服および臥  
 床等の交換はかならず日中温かなる時よ於てそるを良とそ如何と  
 なれば朝夕は常に褥汗を發するあ多きが故に日中に比すれば甚  
 だ感胃し易きを以てなり○床中に安臥して身體の動搖を避くると  
 あきを温煖にして褥汗の閉止を防ぐとの二件は産褥の養生に於て  
 斯の如く緊要の事件なれども左りどて強て衣衾を重ね過度に室内  
 を煖め種々の茶劑を與へて故らに發汗せしむるが如きと密又無益  
 なるのみならずあきが爲汗疹を生じ頭痛を起し睡眠を妨ぐる等却  
 て種々の害を醸す者なり故に温度および衣衾は只褥汗を保ち感胃  
 を防ぐを度として殊に戸隙の風を避け寒煖の急變せざるやう注意  
 するを以て足るりとそまた褥婦の位置は最初仰臥を旨とし四五日  
 の後にあらざれば側臥を許そべからそ而して産褥の經過正規又違

はざる者は産後九日を過ぐれば臥床に起坐し或は纒にこれを離  
 きて褥室を歩行するが如きは敢て妨なけれども初と只一二時間を  
 限として次第に其時を増し漸を以て離床を許すべし而して十四五  
 日を経れ心褥室を離れて他室又出づるあを得れども生殖器の結  
 合ひまた堅固なうざるが爲子宮の轉位そべき虞あるを以て尙數週  
 の間重を提げ荷を擔ひ階段を昇降し身體を屈伸し大便を努責する  
 等總て腹壓を進むるが如き運動之禁せざるべからそまた外出之氣  
 候温煖なれ心三週間の後又至て小心あれを試むるは可なれども天  
 氣不順の時は五六週間を経ざれば不可なり  
 ●清潔は褥婦の養生中最も大切の事件なり故に屢々室内を掃除し  
 空氣の流通を善くし臭氣を除き汚物を去り犬猫を遠くる等其注意  
 皆前卷第七章産室の條に於て述べたるが如し固より衣服敷物等の



汚れたるを直に交換すべきは更に言ふまでもなし就中陰部の周囲は始終悪露の爲に汚さるゝを以て殊に注意して其掃除を怠るべからず即ち最初九日の間は毎日二回づゝ温かなる五十倍の石炭酸に浸したる布片を以てこれを拭き而して後同じ石炭酸中に浸し絞りとる布片若くは潔白の綿を以てこれを蓋ひ其汚れたる綿布は直に室外に除去するべしまた陰部を掃除する布片は其都度かならず新しきを用ひ決して同じ物を再三使用すべからず但し経過平常なる婦に在てはイリガートルにて腔内を洗滌するは却て害あり爲すべからず固より経過の次第によりてはこれを要することあれども是然しながら醫者の指揮に依るべきものとす○産婆は陰部を掃除する時かならず悪露の多少および其性質に注意しまた陰部を檢して腫脹、創傷等これなきや其創面清潔なるや或は白色の苔などを被む

ることなきや否を定めまた外より子宮を按して其収縮の模様を窺ふべし若し後陳痛劇しくして婦にこれに苦むこと甚しきときは時子宮を按摩して煖めたる毛布にて腹を被ひ麥湯、晩茶、白湯、カミツ、煎の類を適宜に與ふべし蓋し煖隨期の経過急速にして且産後直に子宮を摩擦し以て十分其収縮を促されたる者に在ては劇しき後陳痛を起すこと罕なり

●衣服は緩かにして煖かなるを善とす乳房および腹部は成るべく冷へざるやうにそべし然れどもまた煖に過ぐれば害あり腹帯は通例無益に屬すれども若し腹壁の弛緩甚しきや或は腹内空虚の感あるか若くは分娩の経過急劇なりし者にはこれを施すを良とす然れども決して緊縛すべからず只折り重ねたる布片若くは綿花を廣く腹に貼して其上に軽く腹帯を施すべし



●食物は消化し易き物を適宜に與ふべし決して飽食せしむべから  
 そ即ち初三四日の間は軟かなる糜粥に鹽を加へ或は梅乾、味噌汁の  
 類を副へ其他麵、麩、鶏卵、米の類を混じたるソップ、煖めたる牛乳、葛湯等  
 もまた善し魚肉の淡泊なるものは生にても煮て與へても害なしと  
 いへども鳥獸の肉は不可なり然れども已に五六日の後に至れば軟  
 かなる米飯、素麵、温飩、鶏卵、軟かにして脂肪乏しき鳥獸の肉、少量の味  
 噌漬、煮たる菓實等は食して苦しからそ而して健全なる痔婦は三週  
 間前後に至て常食に復するを得れども尙消化し難く風氣を醸し易  
 き物および強き香料は食すべからそ○飲料には麥湯、晩茶、微温湯、砂  
 糖湯等を與へ一週間後に至れば呵啡および紅茶の薄きものは害な  
 し然れども燒酎、ブランデー、ベルモートは勿論日本酒、葡萄酒の如き  
 も強きは害あり與ふべからそまた茶若くは呵啡にても濃きものは

禁そべし但し麥酒の弱きものは乳汁の分泌を増進するの効あり許  
 して可なり

●尿若し膀胱に満ちて長く利せざるときは爲に子宮の收縮を妨げ  
 或は時に忍るべき危變を來すことあり故に産婆はかならず産褥の  
 初期に於て排尿の模様を尋問し膀胱を検査することを知るべから  
 そ已に本巻第一章に記載せしが如く痔婦は假令膀胱充滿するに至  
 るもこれを感ぜざることあるのみならず或は日に數回の尿利ある  
 も其都度盡くこれを排泄することを得て膀胱依然充滿する者  
 またこれあり故に産婆は決して尋問するのみを以て安心すべから  
 そかならずや自ら膀胱を検して以て其虚實を定めんことを要す即  
 ち試みに手を小腹に加ふれば充滿せる膀胱は恰も護謨球の如き形  
 をなして容易にこれを觸知し得べし若しまた産婆未熟の故を以て



これを明断し能はざるも産後已に十二三時間を経て尙利尿なきときはかならず膀胱の充滿するものと察し、痔婦に諭して利尿せしむべし而して若し自ら利し難きときは則ちカタールを以て日に二三回づゝ、これを漏そべしといへども産婆カタールを挿入するに當り聊にても困難を感じたらば直に事を醫に托すべし決して自力を加へて妄にこれを試むべからず但しカタールは使用後毎回十五分時間許り二三十倍の石炭酸中に投じたる後丁寧に拭き乾かして清潔の白紙若くは布片に包みこれを用ふるに臨んでまた五十倍の石炭酸にて消毒するを要す○大便の通利は健康なる痔婦には産後三日の間これなきも害あしと云へども四日にして尙其模様あきどきは宜く灌腸を施すべし而して其灌腸料には微温湯若くは微温の石礮水に二食匙のオンフ油を加へたる者を良とすれども若し

これを用ひて効なきときは一食匙の食塩を加へたる微温湯を用ふべし爾後續ひて秘結する者には隔日にこれを反復せよと云へどもこれを施して効なければかならず醫の診察を請ふべし但し大小便は最初九日の間あらず臥床に於てすること勿論あり

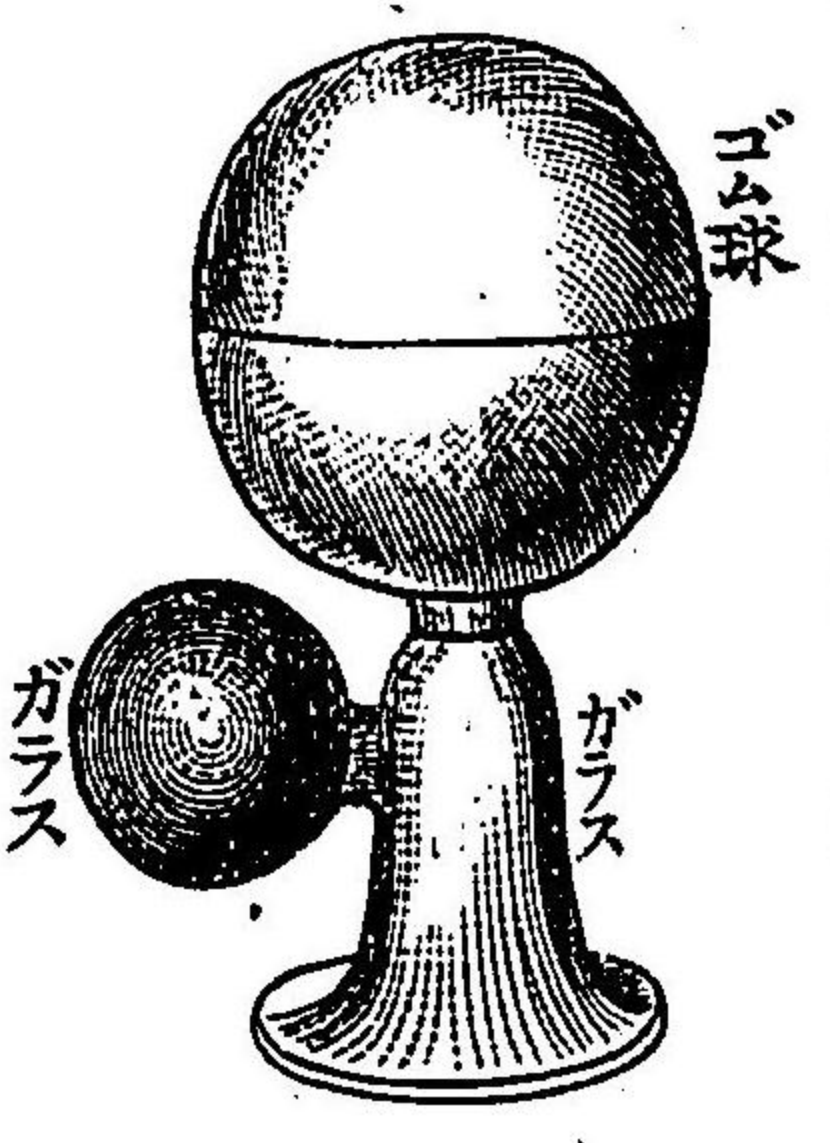
●母の授乳は獨り小兒の健康を保つに大切の事件なるのみならず兒に授乳すればこれが爲母の食氣を増して榮養を進め且子宮の收縮を促し悪露の閉止を早からしめて以て産褥の経過を善くし生殖器の病を防ぐ等母體の養生に於てまた大なる利益あるが故に健康なる痔婦は産後六時乃至八時間を経て其疲勞復し小兒また啼ひて餓を訴ふるを俟ちかならず其乳を授くべし彼の他人の乳を與へまた牛乳などを授けて以て安心するが如きは大なる誤なり況して五香を哺ましめて徒らに小兒を疲勞せしむるが如きをや然れども世



間得てこれあるが如く小兒の嘔吐するに至るまで過分に哺乳せしむるは大害あり故に毎回大約三十分時間許にして最初一週の間晝は三四時毎に一回夜は十時頃と夜半と朝の五時頃の三回に限り二週間以後に至れば夜半の授乳を廢して十時と五時頃の二回とし其代り晝には増して二三時間毎に哺乳せしむべし斯の如く最初より一定の時を限つて授乳すれば假令一時は小兒啼ひて困難を感ずることも須臾にして能くこれに慣るゝ者なり蓋し小兒の啼くは敢て餓を覺ゆる時のみにわらそ或は衣服濡り若くは腹痛む等總て違和を感じたるときは則ち啼ひて以てこれを訴ふる者なり故に小兒の啼く毎に妄に乳を授くるが如きは管に其意を満たさざるのみならず反つて腸胃を損し健康を害すべきものを知るべし○尋婦は産後九日の間小兒に乳を授くる時にもかならず臥したる儘にして決して

起坐すべからそ即ち右の乳を哺乳せしむるときは右に臥し左の乳を與ふるときは左に臥して肘を小兒の枕となし微温湯若くは砂糖水を以て先乳頭を潤ふし而して後これを小兒の口に合まじめ哺乳の間示指と中指にて始終乳房を支へて以てこれが爲小兒の鼻孔を閉塞せざるやう注意すべし固より一方に偏せしめて左右かはるゝ與ふるを良とす若し乳頭短きが爲哺乳困難なるときは指を以て時時乳頭を惹延ばし或は人に吸はしめ若くは護謨製の吸乳子にてこれを吸ひ出ださしむべし斯の如くすること屢々なれば假令乳頭の陥凹せるものにては次第に突出して哺乳し得るに至ること尠からそまた乳汁充滿して乳房の緊張甚しきときは授乳に先つてこ

圖十五第



吸乳子



れを搾り出ださか或は上記の吸乳子にて其一部を吸出ださしむべし小兒若し授乳せらるゝ時に於て其口を開かざるか若くは哺乳運動を爲さざるときは宜く指を其腹に加へ軽くこれを下方に壓して其口を開かしめ而して後舌上に乳頭を貼じ微温の砂糖水を口中に點滴して以て哺乳を促すべし蓋し哺乳の困難は其原因乳頭の形状若くは小兒の性質の何にありに關せそ最初いかに困難なるも産婆かあらず短慮を起すべからそ心のどかに母兒を慰め上記の處置を施して徐にこれを導くべし

●授乳期中母の養生の善悪は只其身の健康に關するのみならず大に小兒の安危に拘るを以て産婆は總に其利害を論してこれを誤らしむるゝ勿れ而して過劇の精神感動と忽ち乳汁に影響して或は其分量を減し或は其性質を變して以て小兒を害するゝあり故に

授乳期中之始終精神を安靜にし其快娛あると不快あるとを拘らす方めて過劇の感動を避くべし然れども偶これと激したるとき之宜く其乳汁を搾り去り而して後一二時間を経て始て哺乳せしむべしまた授乳期中は時々外出して適宜の運動を爲し寒暑冷熱に應じ衣服を加減して感冒を防ぐべし殊に乳房を冷やそは最も害あり故に寒氣の強き時は勿論また寒氣強からざるも眠に就く時はかからそフランチルの如き毛布を以て乳房を被ふを良とそれどもこれを以て強く乳房を壓迫するは宜しからず○食物は風氣を醸さすまた身體を熱せずして榮養分に富み消化し易き物を選ぶべし即ち脂肪少なき鳥獸の肉、淡白なる魚類、消化し易き野菜などを食し殊に米、麥、素麵、温飩、葛粉、馬鈴薯、砂糖、豆の如き澱粉質に富みたる食物を缺ぐべからそ飲料には茶、咖啡、麥湯、砂糖水、牛乳、清水等其欲する所に從ひ與へて



可なりまた授乳期中大便秘結するときは決して長くこれを忍ぶべからず平素注意して時々牛乳若しくは砂糖水を飲み養たる菓物を食して適宜の運動を怠らざれば大抵便秘結することなしといへども若しこれあるときは宜く瀉腸を行ふべし

實母の授乳は前に屢々述べたるが如く母兒の健康を保つに最も大切の事件なれども其母若し前回の授乳期に於て化膿せる乳房炎に罹りたるか或は乳頭甚しく陥没してこれを突出せしむべき諸術も効なきか或は癩癩、精神病、梅毒、癩病、慢性の皮膚病等を思ひ若しくは肺病の素質ある者或は體質虚弱にして病身なる者或は其感情過敏にして憤怒し易き者の如きは皆固く授乳を禁すべしまた右の如き故障なき者といへども若し腹痛、下痢、熱等を發したるときは一時授乳を中止せざるべからずまた授乳期中更に妊娠したるときは直に小

兒を遠けて離乳せざるべからずといへども月經の再來はかならずしも離乳するを要せず此際乳を授くるも決して母兒に害なし時として只二三日の間小兒稍不安となるに過ぎず○授乳の期限は固より風土人情の異なるに隨ふて大に長短の差あれども最良の期限は産後大約九箇月乃至十箇月ありとす蓋し此期に至れば小兒已に齒を生し月經再び來りて乳汁の分泌もまた自ら減るるが故にこれより以上持長すれば母の健康に宜しからず故にかゝらす此時を期として離乳すべし而して小兒を遠くるに於て最も善き法は次第々々に哺乳の度を減し數日若しくは數週の後に至て始めてこれを全廢し決して一時に離乳すべからず然れどもまた數月の久きに亘るが如きは不可なり但し離乳の際乳房の腫脹甚しき者には宜く飲料を節し滋養物を減して乳房に微温の油を塗り綿を被ふて軽く繃帯を施



し兼て日々大便の通利を促すべし

### ○第五章 小児の取扱法

小児生るれば先初湯を施し身體を極めて法の如く臍帯を纏ふべし而して後は毎に皮膚の清潔を旨とし斷へず二便の模様を窺ひ衣服は寒暑時候に應じ起臥は小児の舉動に従ひこれを養ふに母乳を以てしてこれに與ふるにかならず時刻を定むべし

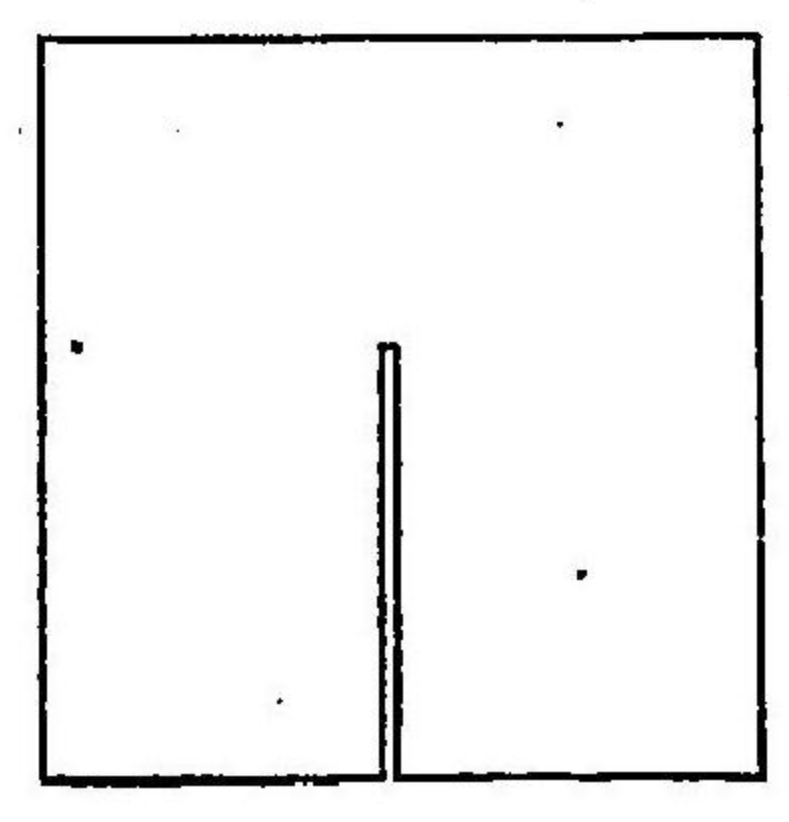
●初湯 は卷の三第七章に記載せしが如く善き助手あらば臍帯の切斷後直に其者をしてこれを行はしむべしといへども然らざれば尊婦の處置を果りたる後に於て産婆自らこれを行ふべし其法小児に適宜の温湯即ち攝氏寒暖計にて大約三十五六度許の温湯に入

れフヲチル若くは軟かなる麻布を以て五分時乃至十分時間許これを洗ひ多量の胎脂附着したる所にはオレフ油、ワゼリン若くは卵黄を附てこれを除去るべし此際小児の眼口に浴湯の流れ入らざるやう取扱ふべきは更に言ふまでもあし故に眼臉を洗ふには同じ布片を用ひすして別に柔かなる麻布を取りこれを別器に容れたる微温湯に浸して用ひ口中もまた清水に浸したる布片を以て丁寧に掃除すべし但し眼臉を洗ふにはかならず外眥の方より鼻の方に向ふて軽くこれを拭くべし○小児を浴中より取出したらば直に温かなる布の上に臥さしめてこれを拭乾かし而して後其身體を檢視して 或は創傷、骨傷および畸形等これなきや否を吟味すべし就中看過すべからざる者は鼻目耳口尿道および肛門の模様なり而して若し右等身體の異常を發見したらば密にこれを其父若くは家族



に告て速に醫の診察を請はしむべきは勿論なれども異常なきときは直に臍帯を纏ひ襠褌を衣せて床中に臥さしむべし但し臍帯を纏ふには再びこれを検して其結紮の十分堅固にして毫も出血なきを確認し而して後第五十一圖の如く半ば断ちたる三寸方形許の清潔なる麻布を以てこれを包むか或は清淨の綿を以て被ひこれを腹の左側に偏せて其上を長さ三尺許のフラチル帯にて軽く纏結すべし而して此紮帯は小兒の入浴毎にこれを新にすべきこと勿論あり

第五十一圖



方形の布片を半断て臍帯を包むに供するもの

●清潔 小兒の健康を保つに緊要の事件なり故に日々一回づ

つ入浴せしむるの外尚二三時間毎に其身體を検して汚れたる都度其部を丁寧に掃除し中冪および襠褌等の汚れたるを去り善く乾きたるを煖めてこれと交換すべし故に始終若干の中冪を地爐に懸け或は湯温婆に纏ふて豫め其需要に備へ置くべし但し浴湯は時日を経るに従ひ次第に其温度を減して攝氏寒煖計の三十三四度に至らしむるを良とすまた夏日には入浴の外毎日一回微温湯にて全身を拭き其温度もまた漸々減して二十度許に下すべし斯く温度を減すれば次第に小兒の皮膚を強壯ならしめて以て感冒を豫防するに最も妙なり其他小兒の室は明朗にして日當善く清潔にして臭氣に遠かり乾燥して空氣の流通善き所を撰ぶべしまた生後三四箇月に至れば時を定めて大小便を促し以て居ながら衣類を汚さゆるやう次第に慣れしむべし



●大 小 便 の通利および其性質は以て其食物の善く小兒は相  
 應せるやまた小兒の健全なるや否を察するに最も確實の徴候たる  
 が故に産婆は始終これが検査を忘るべからず但し初生兒は最初胎  
 糞を下し二日乃至四日の後に至れば粥の如き硫黄色の大便秘し  
 て一晝夜に二回乃至四回の通利あるを常とするもと本巻第三章に  
 於て述べたるが如し故に一晝夜の間一回も通利なきときは健康に  
 害あり宜く微温湯若く之を等分の牛乳を混したるものにて灌  
 腸をせし若し此法にて効なれば更に一茶匙の單舍利別若くは蜂  
 蜜を加へたる微温湯にて試むるを以て得れどもこれを試み  
 て尙効なき者と直に醫の診察を請とざるべからずまた小兒屢々緑  
 便を利する加若くは水瀉するときはまた同じ○小便の通利と頻々  
 あるを以て善とし尿閉と間々危に至るの兆とす

●衣 服 と時の寒暑に従ふて固より一様ならずれども要するも  
 寒し失せず煖し過ぎざるを以て度とせば然るも世の母親たる者  
 の小兒は衣を視るも常々煖し過ぎるの習慣あるが如し煖し過  
 ぐるに猶寒し失するが如く小兒の健康に害あるが故に産婆宜く此  
 等の事を其父母に説諭して以て過不及あるを戒めしむべしまた小兒の  
 衣服を成るべく寛裕にして手足の運動を自由あらしむるも肝要  
 あり故に中帯・帶紐等に至るまで決してこれを究窟し纏ひ堅く締む  
 べからず頭部と風日寒天あどよと空氣の流通宜しき頭巾若くは綿  
 花を以てこれを被ふべしと云へども氣候温かある時か或は室内に  
 於て毎又これを被ふときは反て頭部の皮膚を虚弱あらしめて以て  
 感冒し易き癖を生ずるの害あり○前も述べたるが如く時候に従ふ  
 て衣服を加減するは當然なれども概して襦袢は木綿にてはフラスネ



ルも成るべく柔かある物を以て製し上衣および中衣は成るべく長を長とせ而して腰より足に至るまでと麻布若くと木綿の中帯を以て緩かよおれを纏ひ特設けたる床中よ側臥せしむべし是側臥と小兒の嘔吐する時其吐出を容易あふしめて以て喉頭氣管等又吐物の吸入するを防ぐべき利益あるが故あり蓋し小兒を其母と同衾せしむる之自然又適するが如くあれども其實反て母兒よ種々の害を爲すべき虞あるを以てかあふせ別臥せしむべし就中睡り易き癖ある母親よと固く同衾を禁せざるべからず然れども小兒の身體之甚だ嫩弱よして大に冷へ易きが故に氣候寒き時と最初一二週の間床中よ湯温婆を入きて適宜よあきを煖むべし但し湯温婆よと尋常の磁罈よてもフランコよても可あきどもかあふそあきを布片よ包み且其栓の脱せざるやう深く注意せざるべからず

またあきを以て床中を煖むるよと度よ過ぐるときは大に害あり世人或之光線を恐きて故らよ小兒の臥床を暗所よ設くる者あきども是甚しき誤あり固より初生兒の眼之尙嫩弱よして劇き光線よと堪へ難しとゆへども適宜の光線之堪して恐るゝよ足らざるのみあふそ強て室内を暗くするが如きと反て害あり故に只劇き光線を避け兼て塵埃を防ぐが爲枕頭よ紗を張るか或は臥床を蚊帳の内よ設くるを良とす殊に蚊帳は劇き光線を避くるのみあふそまた蠅蚊あとの薬水を防ぎ小兒を安眠せしむるよ最も妙なり

● 嬰兒の起臥に就て注意すべきあきと則ち生後三四箇月の間之床の中よても抱く時よ於ても時よ其位置を左右よ轉するの外始終あきを安臥せしめ強て起坐せしむべからず而して已よ三四箇月を経て小兒自ら其頭を擧げ背を伸べして起坐せんあきを要



むるが如き模様あるに至らば蒲團にて其前後を擁み温かみ包んで  
 以て起坐せしむる之可なりと云へども項背の力もまだ充分ならざ  
 るが故に久しきと過ぐる之害あり○小児生れて十日も経たらば氣  
 候温和なる時少しつゝ外に連れ出だそ之妨なれども風雨寒天  
 と決して室外に出だそべあらそ但し小児を運ぶとあれを手抱  
 くか或之守籠に入れ三四箇月より以後に至れば動搖せざる車に乗  
 せるもまた甚だ善し然れども從來民間に於て得て行はるゝ如くあ  
 れを人の背に負としむるが如き之爲も小児の胸腹を壓迫して其發  
 育を害するあるべし況して事理の辨別もなき少女の背に頭を  
 垂せて睡らしむるが如き之傍觀するも尙忍びざるなりまた小兒  
 啼ひて騒がしきときあれを慰めんとして其身體を震動するが如き  
 甚だ害あり抑もあれは由て小児の啼止むと敢て愉快を覺ゆるが故

にあふそして只其嫩かなる腦を震動して以てあれを迷暈せしむる  
 又過ぎざるなり故にまた動搖の強き車に乗せて街上を曳廻そが如  
 きも固く禁せざるべからず己に前章に於て述べたるが如く抑も小  
 児の啼くとたい其饑渴を訴ふるのみにあふそ或之衣類濡り若くは  
 帯紐堅くして腹痛む等總て其感する所の不快を訴ふるものなり故  
 に饑渴の模様なきも小児尙啼ひて止まざるときとかなふそ帯紐を  
 解き衣類なふびも身體を検し其原因を探りて以てあそを除くべし  
 然るも尙鎮靜せざるものとかあふそ病あり宜く醫の診察を請ふべ  
 し

●食物 之最初九箇月の間母乳の最も相應するものと前々  
 述べたるが如し故に健康ある母にして眞實其兒を愛する者はか  
 ち己の乳を以てあれを養育するものと肝要あり然れども其身よし



て若し前章より列記せしが如き病も罹るか或は他も止み難き事情ありて自ら授乳し得ざるるときはこれより代へて最も善きもの之則ち健康ある乳母の乳として彼の獸類の乳を以て養育するが如きと萬止むを得ざるるときはあらざればこれを許さばかかそ然れども乳母の良否を定むるより大に醫學の知識を要するが故に其選擇にかかると醫又托すべきものにして産婆の敢て關する所もあらず如何となれど其良否を決するより獨り其乳母とあるべき人および其兒現在の容體をのみ検査するより止まらずして尙遺傳病の有無をも診定せざるを得ざればあり故に此より人乳より依らずして小兒を養育する法即ち人工養育法の要領を附言するより左の如し

人工養育法を以て嬰兒を育するより其注意密にして取扱法また嚴密にされんことを決して全効を期すべからざる故に産婆之懇み其

母若くは看護人より其注意すべき事件と取扱法とを諭し且切にこれを實行せしむべし若し一朝其法を誤りて小兒より不相應の食物を與ふるが如きとあつらふ其害や實に旬日を出でずして忽ち肚腹膨満して便通不順とあり劇き腹痛も苦んで次第に衰弱し憊倦も死を免るゝとあるも虛弱多病の人とありて終身人たる者の幸福を得べからざるに至るべし豈深く戒めしめて可からんや蓋し小兒の死その原因の過半は腸胃の病にして即ち養育法の宜を得ざるより來るものとす是小兒の消食器と其力尙不充分にして齒もまだ生せず唾液缺乏して腸胃甚だ軟弱あるを以て若し食物の性質若くは其分量より於て聊かも不相應の所あれば須臾もあれば堪へずして忽ち其働も變動を起すを以てあり故に小兒生れて數箇月の間と流動の食物をのみ與へて固形の食物若くは糜粥等を與ふべからざる



之勿論流動物中よても成るべく人の乳は相似たる物を擇ぶべし而して牛の生乳之則ち最もよくあれは類似して且得易きものあれを以て第一の代用品と然れども尙人の乳は比それを消化し難き故よあれを嬰兒と與ふるよと宜く水を和して薄め砂糖を加へて甘味を補ふべし○嬰兒と與ふべき牛乳之朝搾の新鮮なるものよして其牛之健康清潔常々乾燥せる飼草、葉、糟等を以て飼養したるを最も善とぞ大根、蕪菁、馬鈴薯、青草等の如き水分多きものよて飼養せる牛の乳之不適當なりまた乳之概して甚だ腐敗し易きものなるが故毎朝新購求めたる牛乳之如何よ新鮮のものよてもかなふぞ先あれを煮て沸騰せしむるよと二三十分時間許よして其上皮を去り而して後清潔なる陶製の瓶よ容を堅く栓して冷やゝかざる所よ蓄へ置くべし斯く一度沸騰それを其腐敗して味の酸くあるを防ぐ

のみあふよまた大に消化し易くある者なり而して入用の都度與ふべきだけの分量を瓶より出だし一々薄めてあれを用ふべし決して一度よ薄め置くべのよよまた哺み餘したる乳を再び與ふべのよよ但し其薄め加減之最初八日の間牛乳一分よ水三分其次之牛乳一分よ水二分としまた減して等分とあし四箇月の後よと牛乳三分よ水一分を和し六箇月以後よ至れを薄めよして可なり而してあれを薄むるよとあふよ温湯を以てして乳の温度を人の體温と同く大約攝氏寒暖計の三十六七度許よ爲よべし若し其温度不足あるか或は高に過ぐるよとき之忽ち嘔吐、下痢を發するよと多し注意よべし固より牛乳を斯く薄むれば自然其甘味を減するが故かあふよ少量の砂糖を加へざるべかあふよ但し其量は大抵薄めたる牛乳五勺に乳糖五分とそれよ若し乳糖あれあきよとき之白糖もよてもまた可あり



善き牛乳を得難きときされ、又代用すべきものとしてコンデンスミルク或は乳の粉など其品種類々ありとゆへども品質善良にして適當の物に至ると尚ほ甚し且小兒の年齢體質の強弱および消食器の模様等も由て其用法もまた一樣あらずるが故斯る代用品を與ふる場合も其品種の選擇、用法等皆醫の指揮に依るべきものとす然れども小兒生れて已に六七箇月以後に至れば牛乳或は其代用品を與ふる傍尙粥汁、摺湯、若くは薄き葛湯の類も適宜の食鹽および砂糖を加へたる物或は水飴の如きを日一二回づゝ與ふるを害あし小兒若し虛弱あれば鳩若くは鶏のソップも右の摺湯、葛湯の類を加へて與ふれば愈々可なり然れども糜粥の如きと齒已に生したる後あふざれば與ふべからず但し以上の食物とあふせしむ大人に於るが如く彼此交換するを要せざるのみあらず小兒を養ふと反て一樣

の食物を以てするを良とす  
 凡そ小兒は食物を與ふるよ牛乳もて摺湯の類もかあらず  
 あれを吸せしめざるべからず故に硝子製の哺乳器もて與ふるよ  
 最も便利あり固より哺乳器を常とされ清潔とすべきこと言ふま  
 てもあくあれを用ひたる後よ其都度哺乳器を洗ひたる後去り瓶  
 も護謨管も内外とも清水もて丁寧と掃除し且護謨管を始終水中  
 も浸し置くを良とす小兒の口中もまた食後かあらず柔かある清潔  
 の布片もて掃除すべし但し牛乳一回の分量を固より小兒の年齢強  
 弱等も從ふて一樣あらざれども通例生後數週の間上記の如く薄  
 めたる牛乳を中等大の椀もて八分乃至一椀(六乃至八食匙)とし成長  
 するよ從ふて漸次適宜とされを増せしまた其度數と母の乳を與  
 ふるよ同じ然れども常と多と失しおれが爲消食器を害して嘔吐、腹



痛を起し甚しく煩躁啼泣するに至りしむるゑと世上の通弊あり見  
 を養育する者深く注意すべし  
 抑も嬰兒の消食器と斯の如く鋭敏にして食物の品質、温度、分量よ  
 び其用法等の小異も由て忽ち大害を蒙むる者あるが故人工みて見  
 を養育するも之前と述べたるが如く實に嚴密の注意を要する者あ  
 り故に其取扱を成るべく他人に托せしめて情愛深き母  
 の手を以ておれよ任せざるべから  
 若しまた止むゑとを得ておれを看護婦に托するときはか  
 らうそ信切伶俐として注意深く且此等の事を経験ある者を撰ぶべ  
 し然れども尙其母親たる者におれよ放任するゑと全く始終看護婦  
 の小兒に對する舉動と小兒成長の模様を注意するゑとを忘るべ  
 からしめて小兒若し安靜壯健にして日お成長し大小便の通利およ

び其性質も異常なきときは是則ち其食物相應して看護の法もまた  
 宜しき適ふたる者と知るべし

産婆も右第四章および第五章に述べたる母兒の養生  
 法を實行して其健康を保たしむるゑ産後九日の間  
 毎日朝夕二回、其後五六日の間を毎日一回づゝかなら  
 ず其家に到て精密に母兒の容體を尋問し、叮嚀におれ  
 と看護せざるべからず但し十四五日以後に於ての尋  
 問も、尊婦の希望經過の模様或は醫者の指揮に應じて  
 適宜に斟酌すべし

産褥中起る所の恐るべき病變も多く産後九日以内は在て尊婦の養  
 生および看護法の不注意より來るものあるが故に此間産婆にかか



少そ毎日朝夕あるを尋問して細く其容體を窺ひ前の第四章に記  
 載せし方法に依て懇に之れを看護すべし然れども已に九日を経て  
 子宮の底部殆ど骨盤上口より下りて外陰部、膈および子宮内の創面も  
 略ぼ癒へ悪露もまた褪色減少して痔婦も室内の起坐歩行を少時  
 間づゝ許すべき時又至れを一日一回の尋問し止め二週間以後又至  
 れを子宮全く骨盤内より取り諸所の創面も己に平癒して経過の平常  
 なる者よとまた恐るべき病變を起さざればなきを常とせるが故  
 又産婆の尋問之かなうともまた之れを要せざれども痔婦にして  
 尙其尋問を希望するか或之経過の模様若く之醫者の指揮に依て  
 れを要すべき場合又於て之固より産褥経過の如何なる時期に在る  
 又開せし其時の次第又應じて尙之れを看護すべきかと勿論なり  
 痔婦および嬰兒の取扱法又就て之前記を以て更また贅

前編卷の四終

言を要せざれども産婆日々之れを尋問する時又方て殊に注意すべ  
 き要件を擧ぐれば則ち室内の温度、空氣の流通および清潔法等を除  
 くの外睡眠の模様、大小便の通利、痔汗の多少、子宮收縮の強弱、外陰部  
 腫脹の有無、悪露の性質、乳房の虚實、體温の高低、脈の緩急、食氣の増減  
 等よして小兒に就て之其睡眠、哺乳および呼吸の状態を除くの外耳目  
 鼻口の模様、肛門および耻部の乾濕、臍帯の變化、二便の多少および  
 其性質等是なり



明治二十四年九月十二日印刷  
明治二十四年九月十四日出版

正價金壹圓拾錢

著述者兼

熊本縣士族

濱田 玄 達

東京市麹町區飯田町  
三丁目貳番地寄留

根岸 高 光

全牛込區市夕谷加賀町  
登丁目廿三番地

橋本 角 次 郎

全京橋區新宮町登丁目貳番地

京橋區西紺屋町廿六七番地

秀 英 舍

市夕谷加賀町工場

島 村 利 助

全日本橋區馬喰町貳丁目



印刷者

圖畫印刻人

印刷所

發賣書肆



工3760

賣 捌 所

東京本郷區春木町三丁目

嶋村利助支店

全 全 湯嶋切通坂町

南 江 堂

全 日本橋區通三丁目

丸 善 商社書店

大坂心齋橋筋壹丁目

松 村 九 兵 衛

西京二條通柳馬場東へ入

若 林 茂 一 郎

肥後熊本新壹丁目

長 崎 次 郎

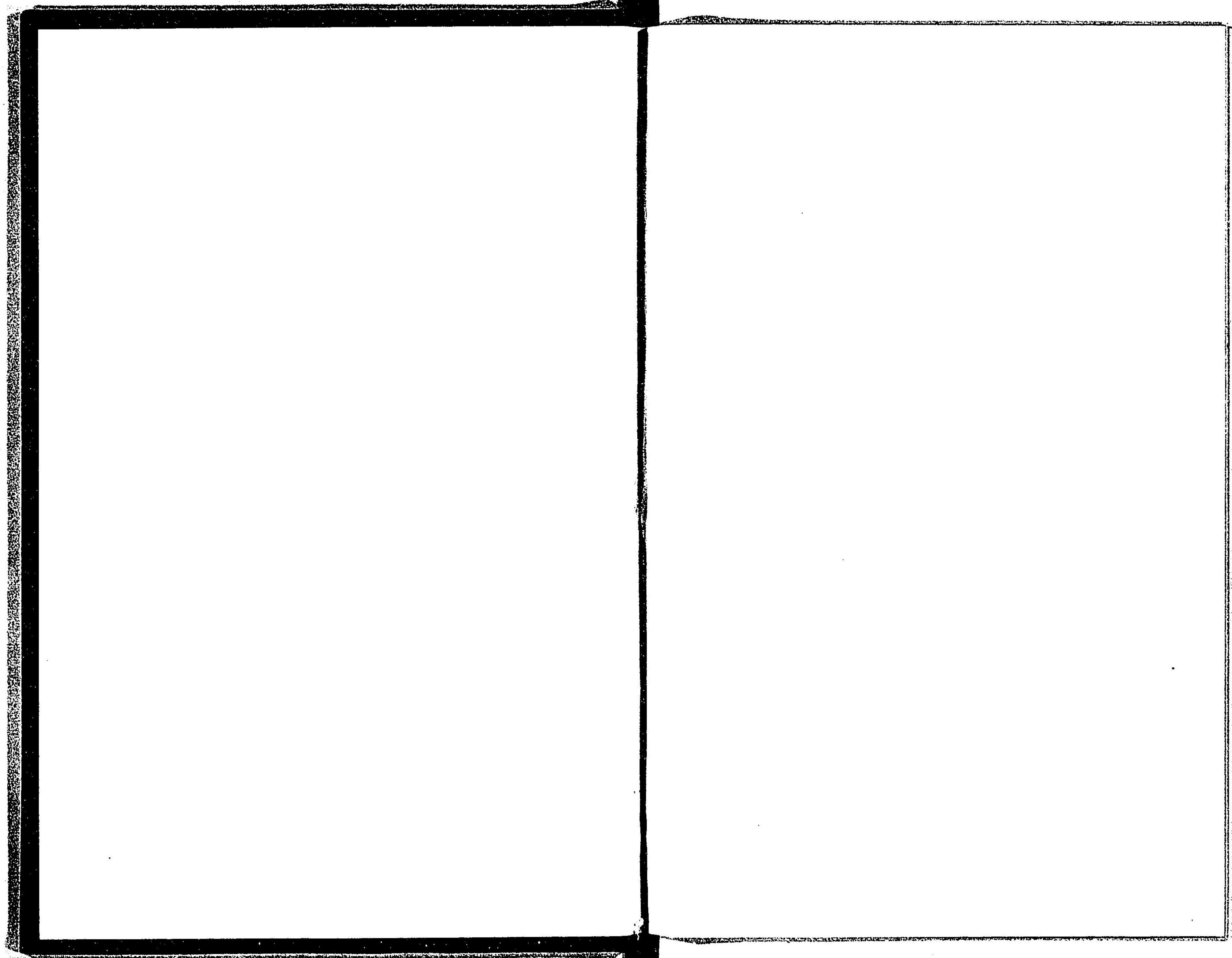
尾張名古屋京町

村 松 五 郎

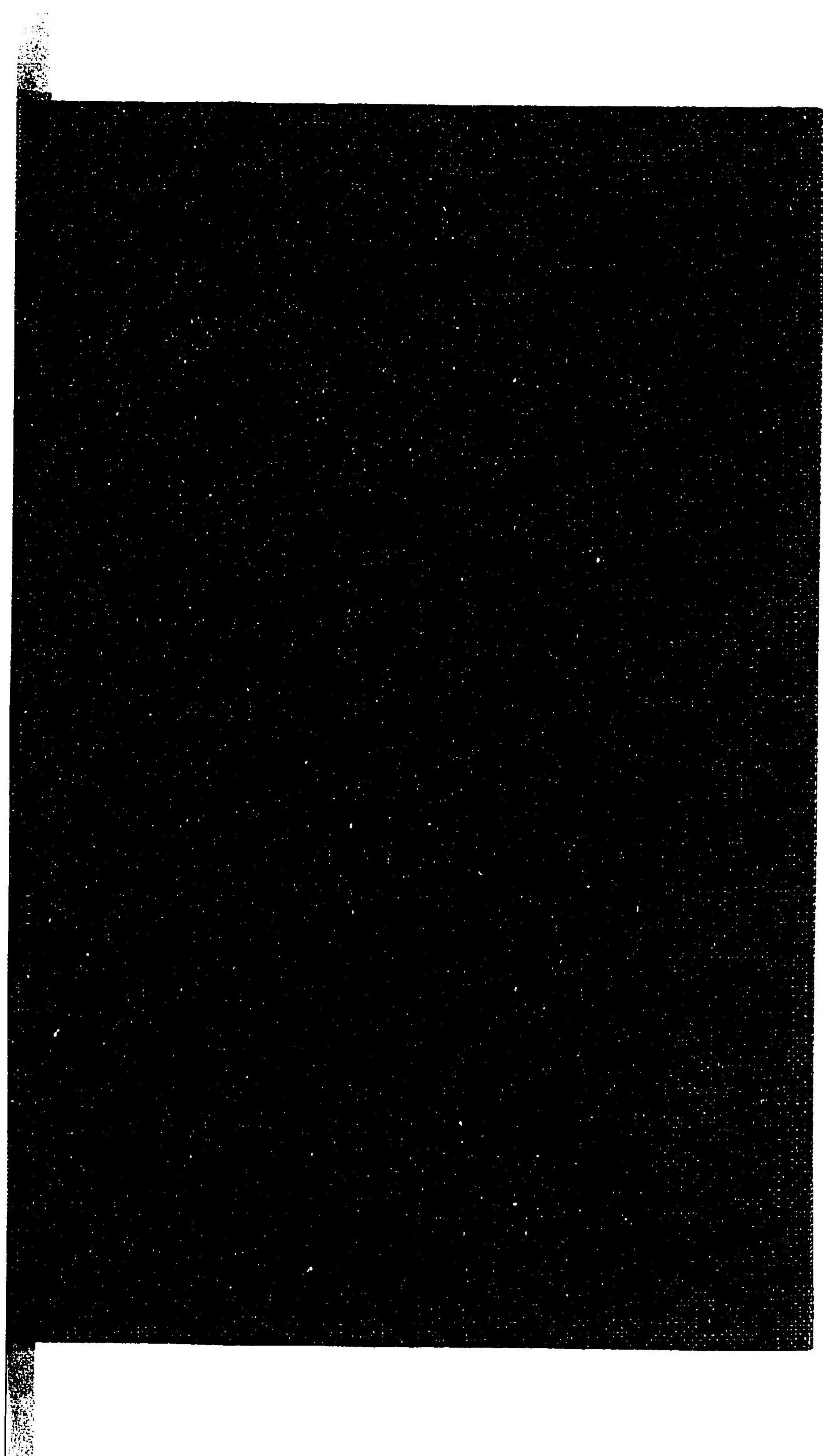
備前岡山石關町

渡 邊 千 代 治











42  
43

059864-000-1

42-43

産婆学 前編

浜田 玄達/著

M24

CBI-0110

